

悟空とベジータのハンター試験？

KTケイティ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悟空とベジータがハンター試験に参加。

問題が起こることしか想像できないこの二人がどうなるか…。

ドラゴンボール×ハンターのSSです。

〈この続きの作品はこちら〉

『ベジータの天空闘技場攻略』

<https://syosetu.org/novel/1523>

92 /

目次

〔1〕	ハンター試験つちゅーものに参加すつぞ	1
〔2〕	目指せ一本杉	4
〔3〕	いぎ、試験会場へ	8
〔4〕	一次試験 開始	11
〔5〕	一次試験 地下道突破	16
〔6〕	一次試験 ヌメーレ湿原	21
〔7〕	一次試験 二次試験会場へ急げ	26
〔8〕	二次試験 料理人ベジータ(1)	30
〔9〕	二次試験 料理人ベジータ(2)	34
〔10〕	二次試験 再試験	39
〔11〕	飛行船内 試験官たちの会話	43
〔12〕	飛行船内 ネットロのボール取り	47
〔13〕	三次試験 開始	52
〔14〕	三次試験 攻略のベジータ	56
〔15〕	三次試験 攻略の悟空	60
〔16〕	四次試験 開始―自由なサイヤ戦士たち―	67
〔17〕	四次試験 途中帰宅	73
〔18〕	四次試験 悟空、点数を集める	77
〔19〕	四次試験 日常のベジータ	83
〔20〕	四次試験 ほくほくの亀仙人	87
〔21〕	四次試験 屈辱のベジータ	93
〔22〕	四次試験 みんなで修行だ	100
〔23〕	四次試験 終了	106
〔24〕	最終試験 事前面談	110

【25】	最終試験	試合開始(1)	116
【26】	最終試験	試合開始(2)	121
【27】	最終話		124

【1】ハンター試験つちゅーものに参加すつぞ

魔人ブウを倒し、平和な生活を送っていたある日。

「悟空さ！少しは働いてくれ！」

「そんなこと言ったってよお…オラ働くとかわかんねえぞ」

「ブルマさんとこの工場でもなんでもできることはあるべー！」

「わかったよブルマんと言って聞いてみるよ。ブルマブルマ、つと…」
シユン

「よっ！ブルマ久しぶり！」

「あら、孫くんじゃない！どうしたの急に？」

「いやー、チチが働け働けてうるさくて…」

「当然じゃない…、まあ孫くんが働いてるところなんて想像できないけど」

「ちゅーことでさ、なんか仕事ねえか？」

「あんたもいきなりねえ…」

（うーん、孫くんでも出来る仕事ねえ…）

ハツと閃いたようにブルマが顔を上げる。

「ちようどいいわ。ハンターになりなさいよあんた」

「ハンター？」

「そう、あんたに難しいこと言っても仕方ないから簡単に説明するけど。試験を生き抜いて資格が取れたらお金が手に入る、みたいな感じよ」

「そんな簡単なことでもいいのけ!？」

「まああんたなら余裕でしょ」

そこに大きな声がかかる

「ちよつと待て！そのなんとか試験とやら、カカロットが出るならオレも出てやるー！」

「”出てやる”じゃないわよ！あんたもーゼニーも稼いだことないんだからね！こっちから行かせてやりたいくらいよー！」

「なんだとおおおおおお！」
「まあまあ、ベジータいいじゃねえか。一緒に行こうぜ」
「チツ。さっさと場所を教えろ！」
（孫くんも不安だけど、ベジータも一緒に行くととなると滅茶苦茶しそ
うで不安だわ…）
「教えてあげるかわりに少し待ってなさい」

〜5分後〜

「はい、二人ともこれ着けて」
「オラ腕時計なんかいつも着けねえぞ…」
「違うわよ！リミッターよ。二人とも滅茶苦茶し過ぎるからこれ着けて
パワー制御して行きなさい」
「ふんっ、そんなもん着けなくともサイヤ人の王子であるこのオレ様
はパワーコントロールなど自由自在だ！」
「あんたいつも重力室壊してるでしょうが！」
「む…」
「はい、着けて」

しぶしぶリミッターを着ける二人。

「なっ…！体が重い!?なんだこれはブルマ！」
「どっひゃー、ぜんぜん力が出せねえぞこれ」
「ふふーん。でしょー」

ニンマリとするブルマ

「それはサイヤ人達が使う、スカウターでいうところの戦闘力を20
にまで抑えるものよ」

「さ、サタンと同じくらいか…」

「こんなもの着けてられるか!…なにっ!?!」

「ふふーん。外せないでしょー」

更にニンマリとするブルマ

「あんたたちいま戦闘力がものすごーく低いのよ?私が頑丈に
作ったりリミッターはいまのあんたたちの力じゃ外せないってこと」

「な、なんだとおおお!？」

「まあいつか。そのハンター試験つちゆうやつに合格したら外してくれるつちゆうことか?」

「そーいうこと」

「ちつ、じゃあさつさと場所教えやがれ!」

「あともう一つよ。あんたたち、空飛ぶのはやめなさいよ」

「なんでだ?」

「目立つに決まってるでしょうが。どこの世界に空を飛ぶ人間がいるって言うのよ」

「いっぺえいるじゃねえか。ヤムチャにクリリンに:」

「私たちの仲間以外の一般人で、つてことよ」

「オレ様は誰の指図も受けん!」

腕を組んでポーズを決めるベジータ

「なによあんた。空飛んで普通の人より有利じゃないと試験も合格できないわけ?」

「ぐぐつ:最近では飛ぶのも飽きてきたところだからオレには関係ない!」

「そーいうことにしといてあげましようかね」

「なあブルマ、早くハンター試験の受け方教えてくれよお」

「はいはい。ザバン市ってところなんだけど、説明面倒だから連れてってあげるわよ」

3人はジェットフライヤーでザバン市へと飛んだ

【2】 目指せ一本杉

「さ、着いたわよ」

ザバン市へと到着したブルマ達。

「この後はどうすんだ？」

「まずはあの山の頂上、一本杉を目指すのよ」

「あの山が会場っちゅーことか？」

「違うわよ。あそこは会場への案内人がいるところよ」

「はへー、なんでも知ってたんだなおめえ」

「カプセルコーポレーションはハンター協会の最大スポンサーだからね、これくらいは当たり前よ」

「ちつ、それなら会場の場所自体教えてもらつときやがれ」

「さすがそれはすぎるでしょ。いいのよ、これくらいで」

一本杉へ向かう三人。

「なんだここ？」

悟空が不思議そうに見上げる。

今まで道だけしかなかった山道の両脇に石壁のような人が作った建物が見えていた。

「おい、カカロット。感じるか？」

「ああ、いるな……」

「なによあんたたち、怖いこと言わないでよ」

その声に反応したように人がわらわらと出てくる。

中心人物は老婆のようだ。

「…………ドキドキ2択クイズ〜クイズ！」

「なによいきなりビックリさせないでよ！」

ブルマを無視して老婆は続ける。

「クイズに正解すれば正しい道を教えてやろうかのお。クイズの答えを考える時間は5秒。①か②のみで答えること。間違えたら即失格じゃ」

「オラ難しいのは苦手なんだけどなあ」

「5秒!?失格!?難しすぎでしょ!失格は無しにしないよ!」

「無理じゃな。ひよひよひよ」

「ちっ、薄気味悪いババアだぜ」

「いいい?私はカプセルコーポレーションのブルマよ?間違えたら即失格っていうのは厳しいからやめなさい?」

ザワツ

「か、カプセルコーポレーションの娘さんじゃと…?なぜこんなところ…」

「いいじゃない別に。問題も簡単にしないよ。あと時間もよ?」

「ブルマちよつとひでーぞ」

あまりの理不尽さに悟空が顔をひきつらせる。

「く、クイズ出していいじゃろか…」

「ふんっ、さっさと出しやがれ」

「そ、それでは…」息子と娘が誘拐された。助け出せるのは1人。①息子、②娘、どちらを選ぶ?」

「なによこの問題!どっちが正解なんてないじゃない!」

「ふんっ、オレなら誘拐したやつをぶっ飛ばしに行くがな」

「オラ瞬間移動できつからたぶん二人とも助け出せつぞ」

「はい、正解ってことでいいわね。ちゃんとした道教えなさいよ?」

(む、むちやくちやじゃ…)

「で、ではこちらの建物の中を通っていくのじゃ」

「あり?あの杉の木の方と違うけどいいのか?」

「遠回りでも安全な道じゃ。真っ直ぐ行ってしまうと危険な魔物が巣を張っておるからの」

「なに、魔物だと?」

「嫌な予感がするのは私だけかしら…」

「カカロット!真っ直ぐ行くぞ!魔物とやらもこのベジータ様が吹き飛ばしてくれる!」

「危ねえ魔物かあ、オラも戦いてえぞ」

(な、なんじゃこいつら…)

「はあ、あんたたちがいまリミッター着けてるの忘れてるでしょ絶対…」

そして三人は真つ直ぐ道を登っていった。

ボンツ！

「へっ、汚ねえ花火だぜ」

「ベジータずりいぞお」

ゲギヤ ゲギヤ！

「げっ、これ死んでないじゃない！」

「ちっ、パワーが足りん。吹っ飛ばすくらいの気功波しか出せんとはな」

「なんか痛め付けてるだけみてえで可哀想になつてきちまつたぞ…」

「既に魔物の方が警戒して距離とつてるじゃない…ホントにあんたたちのほうが化物よ…」

「お、着いたみてえだぞ」

一本杉の下にある小屋へと辿り着いた三人。

一番に入ろうとするベジータを悟空が止める。

「待てベジータ！中で危ねえ気配がする！」

「魔物ども、いい加減イライラしてきやがったぜ…小屋ごと吹き飛ばせばいいだけだ！ビックバンアターーック！」ズアオツ

パラパラ…

「あ、あんた跡形もないじゃない…」

（一瞬だけ戦闘力が100近くまで上がったわ。まだまだ改良する必要があるそうね…）

「どっひゃー、ベジータやりすぎだぞお」

「ふんっ」

そのとき

「あ、あんたあああああああ！息子おおおお！娘ええええええええええ！あああああああああ！！！」

泣き崩れながら瓦礫に飛び付く魔獣キリコ。

「…も、もしかして…」

冷や汗を流すブルマ

(くっそおおおおーマズイぞおおおー！)

ベジータは焦りどころではなくブルマから距離を置く

そんなベジータとは対象に、悟空は平然と言う

「あちやあ…、まあでえじようぶだ。ドラゴンボールがある」

【3】 いざ、試験会場へ

「ははっ…それじゃあ…」

と、苦笑いをしながらそそくさとそこを離れる三人。

もちろんベジータにはブルマからの拳骨が落ちていた。

「もー、あんたのせいで会場の場所案内してもらえなかったじゃない！」

「…」

「なんとか言ったらどうなのよ！」

(ちくしょおおおお！)

「んで、どうすんだ？」

「もぅいいわよ、ちよつと待ってなさい」

携帯を取り出して電話を始めるブルマ

「あ、ネテロさん？ブルマよ、久しぶり。ちよつと教えてほしいことあるのよ。今年のハンター試験会場どこ？え、そんなところ？合言葉、ね。はいはい。んじゃまたねー」

電話を切るブルマ

「わかったわよ、さ、街に降りるわよ」

「なんだよ、最初っから聞いてくれりゃいいのによお」

「うっさいー！」

ザバン市街

「ごごよ」

「お、飯屋じゃねえか。ちよつと腹減ってたところだったんだよ。サンキューなブルマ」

「…まあ、いいわ。面倒だからもうついてらっしやい」

カラン カラン

お店に入ると、ダイニングの方から料理人が声をかけてくる。

「いらっしえーい。3名様で？御注文は？」

「ステーキ定食よ」

料理人は一瞬目付きを変えて聞いてくる。

「焼き方は？」

「弱火でじっくり。とかかさつさと案内してよね」

「あ、あいよ…」

「お客様、奥の部屋へどうぞー」

ひきつった料理人の返事とは裏腹に、明るいウエイトレスの案内の
声を通る。

「もうオラ腹ペコペコだ」

「ふん、行儀のなつてないやろうだぜ」

ガツガツ ムシヤムシヤ

「弱火だと待ちきれずに生で食べるのねあんたたち」

呆れ顔のブルマ

ウイーーーーー

ガシャン

「着いたみたいよ」

「へ？」

「試験会場よ、試験会場」

「試験？」

「はあ？あんたもう忘れたの!?ハンター試験受けに来たんでしょ
うが！」

「わりいわりい、すっかり忘れちゃってた」

「呆れた…」

そんな二人を他所に、ベジータは辺りを見渡す。

(ふんっ、なかなか鋭い目をしたやつがいやがるぜ)

「どうしたのよ嬉しそうな顔して」

ニヤつくベジータにも呆れる

(強い相手でも見つけたのかしら？どれどれ…)

スカウターを装着して辺りを見回すブルマ

(7、9、6、一般人ばかりね…)ピピッ

「98!?うそ!こつちにも86!...結構ヤバイやついるじゃないのよ...」

「どうしたあブルマ?あ、おめえまたそんなもん作ってたのかよ」

「そんな物に頼らないと強さがわからんとはな」

「うるさいわよベジータ」ピピッ

「あんななんか19じゃない。孫くんは20

よ」

「だにいいいいいい!?壊れてやがるんだ!」

「そんなわけないじゃない。壊れるときは爆発する仕様でしょう?」

「ぐぬぬ:貸せっ!」パシッ

「まあいいけど」

ベジータはスカウターをブルマから奪う

そんな緊張の欠片もない二人を見ながらブルマは続ける

「いーい?じゃあ二人とも頑張るのよ?空飛んだり変なことしちやダメだからね!」

「あり?ブルマは一緒に行かねえーんか?」

「帰るに決まってるでしょ!」

「うるさいやつだ。さっさと帰りやがれ」

「:ベジータ。あんだ帰ったらドラゴンボール探しに行きなさいね」
「う...」

「じゃ、合格期待してるわね」

「き、気を付けて帰れよ」

(ベジータおめえ...)

(ふふっ)

ブルマは優しく微笑んで帰りのエレベーターへと乗っていった

【4】 一次試験 開始

「いつぺえ人がいんなあ。これ全部参加者かあ？」

「どれだけいようと全員ぶつとばせばいいことだ」

物騒な話をしていると上から声がかけられる。

「よっ」

壁の配管に腰掛けた男は気さくな感じで手をあげた。

「誰だおめえ？」

「オレはトンパ。見たことない顔だね？新人かい？」

「新人？オラとベジータは初めての参加だぞ」

（ニツヒツヒ、こいつは簡単に騙せそうだ）

「なら丁度いい。オレはこのベテランなのさ。わからないことがあればなんでも聞いてくれていいよ」

「おめえいいやつだなあ」

（特にこいつは単純そうで助かるぜ）

「おっと、どうだいお近づきの印に」

トンパがジューズを渡してきた。

「オラそのじゅーす、ちゅー甘いもん苦手だからいらねえよ」

「まあいいだろう、受け取ってやらんでもない」

ベジータはジューズをもらい、飲み始める。

（1人だけとは残念だが…ククク）

「そうだ、せつかくだから参加者で知ってるやつらを紹介してやるよ」

蛇使いや格闘家の紹介をしている最中に叫び声が聞こえる。

「ちっ…危ないやつが今年も来やがった。44番ヒソカ、あいつにだけは近づくなよ。危険すぎる」

「ふん、あの程度どうとでもなる。スカウターでもたつたの98だ」

「ああ、てえしたことはなさそうだ」

（な、なんなんだこいつらの自信は…98?）

そんなトンパとの会話は、ある人物の耳にも届いていたのだ…

（あの機械…強さを測るものかな？◆面白そうなもの持つてるじゃないか…それにあの2人の肉体…ゾクゾクゾクツ）

「ハンター試験っちゅうのはまだ始まんねえのか：オラ待つの疲れちまったぞ」

「クソツ、イライラさせやがるぜ！」

「ベジータいつもより気が立ってんなあ、ちよつと落ち着けよ。汗までかいてどうしたんだよ」

「うるさい！ほおっておけ！」

「なんだかなあ」

そして悟空は先ほどもらったナンバープレートを見る。

(406番、ベジータが407番。400人近くいるってことか)

「くっ…」

「おい、ベジータ本当に大丈夫か!？」

「…か、カカロット…」

「どうしたベジータ！」

お腹を抱えてうずくまるベジータ

「貴様を頼るのは釈だが：1度上へ連れていけ！」

「もしかしておめえお腹痛えのか？」

ジリリリリリリリ!

そんな時に試験開始の合図が鳴る。

試験官のサトツが二次試験までついてくるようにと言って、一次試験がスタートした。

「べ、ベジータ、始まつちまったぞ」

二人と、あとはナンバープレートを渡していたハンター協会の小男一人がポツンと取り残される。

「あのお、お二人とも始まってますけど…」

「オラも行ってえのやまやまなんだけど…。もしかしてベジータおめえ！…うんこか？」

「う、うるさい!!早く上に連れていけ!どうなっても知らんぞおとおおお!!」

「上つて言っても気を感じねえと：お、そうだ！」 シュン

カプセルコーポレーション

「あいつら上手くやってるかしら…」

「ブルマちゃん、ご飯できたわよお」

「母さん、ありがとう。あいつら二人でゼーんぶ食べちゃうんだからお腹すいて仕方なかったわ」

「昨日から煮込んだカレーだからすすごく美味しいわよお」

「すすごい美味しそう！いったきまーす！」

シユン

「着いたぞベジータ！」

「なにっ!?!ここはオレン家じゃないか!…グググ」

「ええ!?!なによあんたたち!もう終わったわけ!?!」

「いやあ、それがよう…」

「せっかく連れてってあげたのに説明くらいしなさいよ。ベジータも勝手にどこかに行こうとしないのよー」

よろよろとしながら部屋を出ようとするベジータの腕をパシッと捕まえる

「はっ、離せっ!」

「何よその言い方!せっかく好意で連れてってあげたの無駄にしたのあんたたちじゃない。それにハンター試験やらないならドラゴンボール探してキリコさんたちを生き返らせてあげなきゃいけないでしょ」クドクドクド

「う、うるさああああああい!」ゴオツ

ブツチブリブリビビシャーアアア

「ぎやアアアアアアアア!」

ブピッ…

(お、終わった…)

「…殺せ、カカロット」

「おめえきつたねえーなあ!」

「あ、あんたなんてことしてくれるのよ!部屋中に飛び散ってるじゃ

ない！…もうどこからどこまでがカレーかもわかんないし…」

ベジータは

生まれて初めて

心の底から震えあがった…

真の恥辱と

決定的な現場に…

飛び散った光景と

ズボンの中の温かさに

涙すら流した

これも

初めてのことだった…

「カレー、オラも食いてえぞ」

「あんたどんな神経してんのよ…。はあ、ハンター試験もおしまいね」

「そうだ！ハンター試験戻んねえと！おい、ベジータ間に合わなくなっちまうぞ！」ガシツ

悟空がベジータの肩を掴む

「なっ！まさか貴様っ！」

(あのとときの小男の気は…つと)

「まて！せめて着替えさせろおおおおお!!」シユン

シユン

「お、戻れた戻れた。いっ！もう誰もいねえ」

「…カカロット…」

「ベジータ、やべえぞ！もうみんな行っちゃってる！」

「貴様あ！もとの場所に戻せええええ!!」

「時間もねえしいじやねえか、いつも修行してて汚れてることだし」

「修行の汚れとは明らかに違うだろうがああああ！」

「行かねえならオラ一人で行くぞもう」

ダダダダダダダ

走り始める悟空

「ちっ、ちっくしよおおおおお!!!」

地下道にベジータの声が木霊した

そして、影からそれを見ていた人物が一人…

(念の基本、絶◆どうやら気づかれてないようだね◆さて、狩るか…)

【5】 一次試験 地下道突破

「あの、大丈夫ですか？」

ハンター協会の小男が参加者の407番、ベジータに話しかける
「う、うるさい！どっか行きやがれ！」

（くそっ！これはあの飲み物のせいだ…）

「トンパとか言ったか…覚えてやがれえええええー！」

ベジータはスカウターを放り投げ、地下道の壁へと近づく

「水の流れている管は…これか」バギツ

水管をへし折り水浴びをする

ダバババババババ

「なっ！この水は！」

（下水か！）

頭から汚物まみれになるベジータ

「ぐ、ぐ、ぐ…ちくしよおおおおお!!」

ベジータが汚水浴びをしている間、物陰からヒソカがすうつと姿を表す

（落としていったこれが…あの力を測る機械かな？）

スカウターを装着したヒソカは細く笑みながらベジータを置いて参加者たちを追いかけていった

（それにしても…汚い奴らだな◆）

その後、なんとか上水道の配管を見つけて全身を洗ったベジータ
しかし服に染み付いた茶色と臭いだけは取れなかった

「ちっ、仕方ない。服は捨てていくか…」

全裸になったベジータは急ぎ悟空を追いかけていくのであった

「お、見えてきた！」

悟空はといえば、既にサトツ率いる参加者の最後尾へと追いついていた

「おーい、まだ間に合うかあー?」

一番後ろにいた2人組に話しかける

「君は！残っていたから諦めたと思っていたのだが…。ああまだ二次試験会場には着いてないから大丈夫さ」

金髪の男が答えてきた

「お！サンキュー！オラ孫悟空ってんだ！よろしくな！」

「私はクラピカと言う。こっちはレオリオだ」

「おう！はっはっ！よろしくなっ！…と言っても喋る元気もあんま残っちゃいないがなっ！」

息を切らしながら答えるレオリオ

「悟空は見たところ余裕そうだな。まあその様子だと試験は初めてのようだが…」

「そうなんだ。オラよくわかんねえけどハンターっちゅうのにならねーといけねえんだ」

(我欲もなく体力は有り余るタイプ、か…)

「悟空、私たちもハンター試験は初めてなんだ。何かあれば協力し合おう」

「おう！よろしくな！せいじゃあオラちよつと先に行ってるぞ。中途半端な速さで走る方がきちいんだ」

よっ、ほっ

つと軽い掛け声と共に悟空は前へ進んで行った

ゼエー ヒューー ゼエー ヒューー

(バカな！オレが脱落…？いやだ…いやだ…)

187番、ニコルは泣きながら走っていた

そこへアモリ3兄弟の容赦ない叱責・罵倒の言葉が降り注ぐ

(あああ……)

そしてニコルは膝から崩れ落ちた

〜数分後〜

「おい、お前」

下を見て項垂れるニコルに声がかかる

「…あ、あなたは…っ！」

(全裸!?)

そう、全裸の男が仁王立ち、いや臭う立ちでこちらを見ていたのだ
「丁度いい。…服を寄越しやがれ！」

理不尽なほどの力で服を剥ぎ取られるニコル

「ちつ、シャツは鼻水でベトベトで着れたもんじゃねえぜ。ズボンも
ブカブカか…サスペンダー着けるしかないか。ちつたあ痩せること
だな」

服を奪った者とは思えない悪態についてその男は走り去って行っ
た

「お、おめえたち見てえな子供もいるんか！」

最前列まで来ていた悟空は、そこに二人組の子供がいるのを見て驚
いていた

「おじさん誰だよ」

ツンツン頭の狐目の男の子が不審そうに尋ねてくる

「オラ孫悟空だ！よろしくな！」

「あれ？クラピカとレオリオの匂いがする。あとちよつと下痢の臭い
も…」

「おめえたちクラピカとレオリオ知ってんのか!? さつき後ろの方で
会ったばかりだぞ」

「オレはゴン。こっちはキルアね。クラピカとレオリオも友達なん
だ」

「そーか、よろしくな！ちなみに下痢の臭いはベジータっちゅうやつ
だ。オラじゃねえ」

「ベジータ、下痢ね。覚えておくよ」

キルアが楽しそうに返事をする。

「あんま言うとかいつ怒っからなあ。本人の前では言わねえほうがいいぞ」

「バラしたのあんたじゃん！」

キルアの突っ込みはなんのその、ワイワイと話をしているうちに長い階段を上り抜け、平原へと辿り着く。

その光景に全員が啞然とする

「…ヌメーレ湿原。通称“詐欺師の壱”。人を騙して誘い出し、食料とする生物のいる危険な湿原です。二次試験会場まではここを通って行かないといけませんよ」

説明をする試験官サトツの横で、地下道のシャッターが閉まる

ウイイイイイン ガシヤン

「ベジータのやつ間に合ってねえのか」

そのとき

「待て！そいつは偽物だ！本当の試験官は俺だ！」

怪我をした男が急に飛び出してきた参加者を引き留める。

手にはひよろ長い猿の死体を引きずっている。

「見ろ！人面猿が試験官に化けてやがるんだ！」

ぎざぎざわっ

(クッククック。なるほどなるほど)

「本物はこちらだね◆」

ヒソカがサトツを指差す

(64…流星は試験官◆)

そして今度は振り返って怪我をした男へ話し掛ける

「君の力はたったの4。そして死体に見せてるそれも4。ということは生きています。そもそもハンター試験の試験官ともあろう者がその程度の力なわけないからね◆君はおわり★」

ヒソカは偽物をトランプで切り裂いた

(やべえよあいつ…)

参加者たちはヒソカから遠ざかった

(あり？なんであいつがスカウター着けてんだ？…まあいつか)

「ふむ、よくはわかりませんが…。これで皆さんもわかったでしょう。」

「ここがそういう所だということ。それでは参りましょう、二次試験会場へ」

そしてサトツはまた歩きだした

【6】一次試験 ヌメーレ湿原

ドグオオオオオン

強烈な音と共に地下道のシャッターは吹き飛んだ

「ちっ、だいぶ離されてやがる」

そう、全裸から上半身裸のサスペンダー仕様（隠れているのは乳首のみ）の服へと進化したベジータがヌメーレ湿原へと辿り着いていた
「薄気味悪い気配がしてやがるぜ。普通の場所じゃないな。カカロツトの野郎の気は…あっちか！」

ベジータは急いで追いかけるのだった

「ゴン、悟空、もつと前に行こう」

キルアが冷や汗を流しながら声をかけてくる

「試験官見失ったらいけないもんね」

呑気なゴンの返事とは裏腹に悟空は

「ああ、すげえ殺気だしてやがるな。いまのオラじゃどうしようもねえかもしれないねえ。でも止めるならオラたちじゃねえと」

「バツ！なに言ってるんだ！止めるなんて無理だ！あんたもそれなりの強さがあるんだろうけど、オレの見立てじゃ少なくともあんたの5倍以上の強さはあるだろうだぜ」

「おめえ良い勘してんなあ。でもでえじょうぶだ」

そしてそのまま三人は走る

霧が更に深くなり、前の人影すら見えなくなって来た頃

「ってー！！！！」

後ろから叫び声が聞こえた

「レオリオっ！」

ゴンが踵を返して戻っていく

「オラも行くぞー！」

それを追って悟空も飛び出していく

「オレは行かないからな…」

キルアは歯噛みしながら試験官のあとを着いていった

「何しやがる！」

「ククク…試験官ごっこ◆」

不敵に笑うヒソカ

「ふぎけやがってええええええ！」

ヒソカを取り囲んでいた男たちが飛びかかる

「うーん、君たちはこれ1枚で充分◆」

「ほぎけええええええ！」

その瞬間

一瞬にしてトランプに引き裂かれる男たち

「君達は全員不合格◆さて、残りは君達二人」

ヒソカはクラピカとレオリオに視線を向ける

その時

「三人、の間違いじゃないのか？」ニヤリ

ヒソカの後ろにはベジータが立っていた

(ボクが気づかなかった?)

「なかなかやるね…ちよつとは楽しめそうだ◆」

興奮した様子のヒソカ

股間をぐぐつと持ち上げる

「貴様変態か！」

「キミに言われたくはないけどね◆」

ヒソカは乳首のみ隠すサスペンダー男に辛辣な返しをする

「貴様っ！生きて帰れると思うなよおおお!!」

そこに悟空とゴンが飛び出してくる

「ベジータ…って、あひやひやひやひや！べ、ベジータおめえその格

好!どうしたんだよ…ププツ」

「笑うなああああああ！元はと言えば全てカカロット、お前の責任

だ！」

「ププツ…悪かったって。今度美味しいもん食わしてやつからさ…プ

「プッ」

「ムカつく野郎だぜ…」

ゴンはレオリオのところへ駆け寄り、怪我を見ているクラピカは緊張した面持ちで考えを巡らせていた

(この場から無事には逃げられない…あの二人が居てもそれは変わらないだろう。ここは一斉に別々の方向に逃げるしかない!)

「さて、準備はいいのかな?◆」

狩る立場のヒソカは余裕の笑みをはらむ

「おっけー!んじゃやるか!」

「待て!こいつはオレの獲物だ!貴様には譲らん!」

一人で戦おうとする二人にクラピカは焦る

「ま、待て!ここは一斉に逃げるべきだ!でなければ玉砕覚悟で全員で一斉に…!」

「ふぎけるな。誇り高きサイヤ人の王子が共闘などしてたまるか。そこで指を啜えて見ておけ、このオレ様があいつをぶっ飛ばすのにな!」

シヤツ

一瞬で裏を取り拳を繰り出すベジータ

(早いっ!)

ヒソカはギリギリでしやがんでかわし、足元に蹴りを出す

ガギィ

(か、硬い!)

「どうした?そんな蹴りではこのベジータ様の足は折れんぞ」ニヤリ
「ここまでやるとは思ってたよ◆」

遠巻きで悟空たちはそれを見守る

「あのヒソカっちゆうやつ、まだまだ力隠してんな。このままだと危ねえかもしんねえ…」

「そんなことまでわかるの?」

ゴンが不思議そうに尋ねてくるのを頷きだけで返す

「さつさと本気になりやがれ」ニヤ

「挑発すんなベジータあ!」

「そうだね、このままじゃ厳しそうだ◆」ズズズ

ヒソカの背後に何かが見えるような感じがした瞬間

「危ねえっ!」

悟空の声も間に合わずベジータはヒソカの拳を顔面に受けて吹き飛ばされる

「お、オラたちの誤算だ…ここまでやべえやつだったなんて」

ベジータは相当のダメージを負い、起き上がれず顔のみヒソカの方を見る

「まだまだ◆」

しかしヒソカは止まらない

クイツ

ヒソカが指を動かしたと思うと、ベジータは顔面からヒソカの方へ飛んでいく

「ぬ?…おおおおお!?」

ドガアア

自分からヒソカの拳に顔を打ち付け、意識を刈り取られた

「べ、ベジータ!」

ベジータの元へ飛んでいく悟空

そしてクラピカは更に焦りを見せる

(どういうことだ?!いまベジータとやらは自分からヒソカの拳にぶつかって行った…いや、引き寄せられたのか?どうやって!)

「さあ、次は誰かな?◆」

「オレが行く!」

ゴンがヒソカの前に立ちはだかる

(やべえ!)

「ゴン!待て!…くそっ!…こうなったら…!」

悟空はヒソカに飛びかかっていく

「キミも楽しませ…」

シユン

(消えた!?)

クラピカやゴン達は目を疑った

そしてその数秒後

シユン

悟空だけが現れた

「ふいー、危ねえ危ねえ」

(え?)

啞然とする三人

「おーい、ベジータでえじょうぶか」

そんな三人を他所にベジータへ近づく悟空

「……………つく、問題はない!」

意識を取り戻したベジータは平静を装う

そんな二人に、クラピカたち三人から声がかかる

「悟空…あの、ヒソカは?」

そして悟空は笑って答える

「ああ、スタート地点に置いてきた」

地下道、スタート地点

ハンター協会の小男は目を丸くして問いかける

「あの、貴方はどうしてここに…」

ぽかん、とするヒソカ

(スタート地点…?いや、ここは…まさか…)

「……………ずいぶんなことやってくれるじゃないか◆」

そう、ヒソカはこう見えて焦っていたのだった

【7】 一次試験 二次試験会場へ急げ

ヒソカは念を込めた

足へと全力のオーラを練り込む

爆発的に膨れ上がった脚力で地下道を疾走する

(こんな屈辱初めてだよ◆)

「悟空、聞かせてくれ。今のは一体なんだ？」

クラピカが聞いただすように聞いてくる

「瞬間移動、つちゆう技だ。見知った相手のいるところに一瞬で移動できる。まあいまはそんなことより、とりあえずみんなに追いつかねえとな。試験不合格になっちゃう」

それに否定する言葉もなく、全員が頷く

「みんな、オラに掴まってくれ」

ベジータ以外が悟空の肩を掴む

「ベジータも早くしてけれ」

「オレは貴様の助けなど受けん」

「さっきのうんこのときは助け求めてきたじゃねえか」

「カカロットおおおおお!!!」

顔を真っ赤にしてキレルベジータ

「うひい、じゃあなベジータ！」 シュ…

「…あり？」

悟空たちは消えかけてまたその場にいた

「おかしいな、瞬間移動できねえみたいだ…」

「ふん、大方このリミッターのせいだろう。ブルマのやつ忌々しいもの作りやがって」

「いいっ!?じゃあオラもう瞬間移動できねえのけ!」

「いや、こいつはオレ達のパワーを抑えてるだけだ。瞬間移動とやらをできなくしてるなら最初から1度も成功したりはせん。おそらくパワーが落ちてそいつができる回数が減ってるだけだろう。戦闘力

20程度のいまの状態では日に4回が限度ってところだろうな」
「はあく、流石ベジータだな。んじや1日経って体力回復するの待つ
か」

「ふっ、そういうことだ」

「んじやとりあえず追いかけっか」

悟空たち5人はサトツの気を追って走りはじめた

その頃ヒソカは…

ハア ハア ハア

(このボクが、こんなに、体力を、使わされる、とはね…)

必死に階段を駆け上がっていた

悟空たちは霧の中を走っていた

ゴンがぼつりと尋ねる

「ねえクラピカ。ヒソカは何がしたかったのかな？」

「やつは」試験官「ごっこ」だと言っていたな」

「ごっこ、って遊びけ？あいつももう大人なのにしよーもねえやつだな」

「いや、たぶん悟空がイメージしてるのとは違うと思うぞ…」

「なんにしるあいつはいますタート地点だ。でえじようぶだろ」

「ふんっ、余計なことを」

「お、試験官たちの動きが止まったぞ。もうすぐだ」

一向はあと少しのところまで来ていた

その頃ヒソカは…

ゼエ ヒューー ゼエ ヒューー

(こ、こん、な…こと、が、あつて…たまる、か…)

ヌメーレ湿原を必死に走っていた

そして悟空たちは会場へと辿り着く

「ふいー、なんとか間に合ったみてえだな」

そこへ声がかかる

「ゴン！クラピカ！リオレオ！と、悟空！」

「あつ！キルア！」

ゴンが嬉しそうに駆け寄る

「どんなマジック使ったんだよ。もう絶対戻ってこれないと思ったぜ」

「うん、オレも覚悟してたんだ。ちょっと臭う人と一緒だったからキルアの匂いも追えなかったし。でも悟空がなんかわかるみたいでさ。なんとか追いかけて来れたんだ」

「…ふーん、すげえのな悟空って」

キルアが悟空を見上げる

「それよりなんでみんな建物の中に入んねえんだ？」

「見ての通りさ。」本日正午、二次試験スタート”って書いてあるんだよ」

「まだちよつと時間あるな、オラ寝るから時間になったら起こしちくれ」グガアー

(ね、寝るのが早すぎる…)

悟空たちが着いてからしばらくのち

「お、時間みたいだぜ。ゴン、悟空起こしてやれよ」

「うん、そだね」

チツチツチツ ピーン

ズゴゴゴゴゴゴ

ちちょうど時間が正午をむかえ、重い扉が音をたてて開いた
そして同じくちちょうど

ゼエエエ ヒユウウウ ゼエエエ ヒユウウウ

意識朦朧としたヒソカが会場に辿り着いていた

建物の中には、5つのちよんまげをした不思議な髪型の女性と、大
型というより巨大な男性がいた。

二次試験の試験官のようだ。

「二次試験は、美味しい」が合格よ。まずはこっちのブハラから」

「オレの好物は豚の丸焼き。このビスカ森林公園に生息する豚なら種
類は自由。それじゃあ…」

ドオオオン

銅鑼の音と共に二次試験スタート。

『ブハラのメニュー参加者150人』

【8】二次試験 料理人ベジータ（1）

参加者全員が会場を飛び出していったあと

「あんたも性格悪いわね。ビスカの森に生息する豚は一種類だけでしょ？」

メンチがブハラに笑いかける

「世界で最も強力な豚、グレイトスタンプ。大きくて頑丈な鼻で敵を潰す。：油断してたら自分が豚の餌になっちまうぜ」

ドオオオン

ぐわああああああ

あちこちで地響きと悲鳴が上がる

「結構危ねえ豚みてえだな」

悟空は油断なく見据える

ドオオオン

突進してくる豚の鼻を正面から受け止め、力で拮抗する

「ぐぎぎぎぎぎぎ！ひー！強ええなおめえ！」

（どつちも化物じゃねえか！）

レオリオは木の影に隠れて様子を伺っていた

「バカかカカロット！よおーく見やがれ！あいつの鼻がなぜこんなにも頑丈で大きいのか！弱点である額を隠すために決まっているだろう！」

「オラもちょうどそう思ってたところ、だっ！」

ガッ

脳天に一撃

ズドオオン

「ちっ、世話のやけるやろうだぜ」

そのシーンを見ていた参加者たちは真似をして次々と豚を倒していく

バツシユウウウツ

気で豚を焼く悟空とベジータ

「お、結構うまそうないだ」

「焼くだけとは芸がないな」

「なんだよベジータ。なんかいいもんあんのけ？」

「さっきの会場に香草と根菜があつたんでな、こいつを…」

ドスッ

ベジータが豚のお腹に香草と根菜を詰める

「そしてゆつくりと焼く」

バシユウウ…ボツ

気を小さく絞って焼き上げ、最後に強い気で焦げ目を作る

「すつげえええな！ベジータ！めっちゃくちゃいい匂いじゃねえか

！」

「ふっ、こんな簡単なもの料理とは言えんがな」

「ちよつと分けてくれよお。あ、オラのと交換してやつからさ！」

「いるかつ！」

ガツガツ ムシヤムシヤ

「うつひやあああ！普通に焼いただけでもうめえぞ！」

「これだけでは腹の足しにもならん」

「んじやもつと捕まえてくつか。そだ、オラがいつぺえ捕まえてくつ

からベジータはさっきの菜っぱとか準備してくれよ」

「菜っぱではない！葉っぱ…でもなく香草と根菜だ！」

「んじやちよつくら捕まえてくつぞ」

既に目的を忘れた悟空とベジータは食材を取りに二方向に別れて
いった

「いつぺえ捕れたぞ！」

「遅いつ！待たせやがってイライラさせるやつだ」

「んで、これをお腹に詰めればいいのけ？」

「ただ詰めるだけじゃない。香草と交互に入れるんだ。根菜の硬いも
のは重ねずバラけて入れろ」

「細けえんだな…」

バシユウウ：ボツ

ベジータが気加減に注意してじっくり焼き上げる

「うっひゃあああ！もう待てねえぞオラ！こんなうまそうなの作れるなんて！ベジータに弟子入りすっかな！」

（なっ／＼／カカロットがオレの弟子にだど!?）

「ふ、ふんっ。もう焼き上がっている。さ、先に食べてもいいんだぞ」
「な、なんだよベジータ気持ち悪いなあ。気持ち悪いのはその格好だけにしてくれよ」

「カカロットおおおお!!」

「へいお待ち！」

会場では70名の参加者が豚の丸焼きをブハラに届けていた

「あらら、テスト生なめてたわ…」

メンチもビックリしながらその数を見ていた

ブハラはペロツと70頭を平らげ、お腹をさする

「もう満足でいい？」

メンチがブハラに問いかける

（あのズボンに上半身裸のサスペンダー男はいないみたいね…変態だから記憶に残って嫌な感じね…）

渋い顔をしながらメンチは銅鑼の鐘を鳴らして終了の合図をした

二次試験 前半 ブハラのメニュー終了！

合格者70名！

（参加者の残りが多い…今年は本当に豊作ですなあ）

様子を見る為に残っていたサトツはしみじみと感じ入っていた

その頃、脳筋2人組は…

「はあく、食った食った」

「食い応えのある豚だったぜ」

「残りは弁当用にでもすつべ。そういややけに静かになったな」

「大方あの豚にでもやられちまったんだろう。軟弱なやろうどもだ豚の一匹の気配も感じないぜ」

「待てベジータ！あっちの方に気が集まってるぞ！」

振り向く二人

「あつちは…会場！………カカロットまずいぞ！」

「へ？なにがだ？」

「くそっ！」

ベジータが丸焼きを掴むと、気を感じる方へ投げた

「よし！」

「お、おいベジータ!？」

「ついてこい！いまは試験中だっ！間に合わなくなっても知らんぞっ

！めいっばい飛ばせええええ!!!」

悟空とベジータは会場へと急いだ！

残された豚の骨の数は、この日、人知れずグレイトスタンプが絶滅したことを物語っていた

【9】二次試験 料理人ベジータ（2）

ドサ ドサアツ

空から豚の丸焼きが2つ降ってきた

「な、なによこれ？」

「うわあ、美味しそうな匂い！」

驚くメンチを他所にブハラはよだれを垂らす

シユタツ シユタツ

そこへ悟空とベジータが降り立つ

「ふっ、どうやら間に合ったようだな」

「ああ…！そうかあ！試験中だったなオラたち！」

「ちっ、緊張感のないやつめ」

「…！だからかあ！丸焼き2つ投げてくれたのはオラの分もってことか！ありがとなベジータ！」

メンチが間に割って入る

「あ、あなたたち…いま飛んでこなかった…？」

（ま、マジい…）

焦る悟空

「じゃ、ジャンプだ…！建物の上から降りてきただけだっ！」

ベジータが取り繕う

「まあいいわ…。それに試験はもう終了してるわよ！あなたたちは不合格！ブハラもお腹いっぱいですぐ食べられないわ」

「ふんっ、それはどうかな。貴様の後ろのやつはそんなことなさそうだぜ？」

「メンチ、この匂い嗅いでたらまだ入りそう…」

「でも終了の合図は出しちゃったわよ」

「美食家ハンターならそんなことより美味しきで合否を決めるべきだとおもうなあ」

ブハラ意見にしぶしぶ納得して丸焼きを食べる許可を出すメンチ

「うまいっ！メンチこれは美味しいよ!!」

「ん、本当！ただの丸焼きじゃないわ！」

「当たり前だ！このオレ様を作ったんだからな！」

「文句なく合格よあんたたち！」

追加2名、合計72名合格！

「心配したよ悟空」

ゴンが安心顔で話しかけてくる

「いやー、すっかり食べるのに夢中になっちまって」

「そーいやもう一人のおっさんは誰？」

キルアが尋ねてくる

「ああ、こっちはベジータだ。ゴンにクラピカとレオリオはもう紹介済ませてたからな」

(あの下痢の、か…)

キルアが汚いものを見る目でベジータを見る

「小僧、よほどぶっ飛ばされたいらしいな」

ベジータが視線を感じて凄む

「べ、ベジータ！子供にまでからむなよお」

ドオオオン

注目を集めるように銅鑼の鐘が鳴り、メンチが宣言する

「だいぶ残ったわね…次はあたし番よ！お題は『寿司』！」

ぎざざわ

「寿司と言っても握り寿司しか認めないわよ！さあ、スタート！」

困惑する参加者

「おい、ゴンわかるか？」

「ううん、レオリオこそ知らない？」

「キルア、君は？」

「いや、こういうのはクラピカのが得意なんじゃない？」

「私が過去に見た文献によると、新鮮な魚と酢飯を合わせたものだと…」

「さかなあああ!?ここは森人中だぜ！」

「バカ者！声が大きい！」

(魚！)

それを盗み聞きしていた参加者全員が川へ向けて飛び出していった

ビスカの森、沼泥の川

「うひい、気持ち悪い魚ばかり」

「まともなネタは手に入らんな…あの女、わかってやってやがるぜ」
泥臭い臭いのする魚を持って会場へと帰る悟空とベジータ

会場では

「あんたも403番並み！」

ガビーン

うちひしがれるクラピカ

というやり取りがなされていた

(魚そのままを米に突っ込むなどどんな神経してやがるんだこいつら…)

あまりの神経にベジータですら引く

「おいベジータあ、どうやって作んだ？」

「寿司も握れないのか貴様！悟飯や悟天に作ってやったりせんのか?!」

「そーいやオラ、飯作ったことねえや。ベジータはトランクスたちに作ってあげてるんけ？」

「当たり前だ！寿司は男の料理だからな！見ておけ！」

ベジータが料理をはじめ

「お前らも見ておけ！気持ちの悪いもの作りやがって！食欲が失せやがるぜ！」

大声で怒鳴り、参加者全員を集める

(なんだこれは…?いいのか…?これがハンター試験なのか!?)

クラピカは愕然とその状況を見ていた

「まずは水洗いだ！鱗についた泥、ぬめり、菌を取る！」

ザアアアアア

「そして次は鱗を丁寧剥がす！皮を傷つけるなよ！後で剥ぎにくくなる！」

ゴリゴリゴリゴリ

「ここまで来たら基本の三枚下ろしだ！まずはエラを取ってそのあと頭、いわゆるカマの部分だな。ここから落とす。そして背骨に沿って包丁を滑らす！」

あつという間に三枚下ろしが出来上がる

「ここで気を抜くなよ！綺麗に血を洗い流すんだ！一番臭みがあるのは血だからな！」

そして皮を綺麗に剥いで冊の状態にまでもってきたベジータは、料理酒と塩を取り出す

「今回の魚は泥のなかにいたやつだからな！臭みは流すだけでは取らん！一度料理酒に漬け込み塩を揉み込む！」

塩を洗い流してキッチンペーパーで水気を取る

「この魚の身は弾力がある！フグのように薄く削ぎ切りにするのが基本だ！」

透き通る程の薄さで切り身を作る

「握りは左手で酢飯を取り、右手に持ったネタで形を整える！この時の握りの強さが重要だ！逆さまにしてもネタが剥がれない程の強さかつ、口のなかで米粒がほどける程の強さで握る！」

そして最後に何かを上に乗せる

「これは生姜をすりおろしたものにかぼすの汁を垂らしたものだ！臭みを取り、サツパリと仕上がる！……これがっ！寿司だ！」

おおおおおおおおお!!!

ベジータを囲む参加者から大歓声が起こる

「どうだ？食べてみたくなったか？」ニヤリ

ベジータがメンチに不敵な笑みを投げる

(なぜだ!?おかしい！立場が逆転するなどあり得るのか!?)

熱気立った群衆を他所にクラピカだけは冷静に状況を見ていた

「た、食べてやらんでもないわ!」

「ふんっ、素直になれんやつだ!うちのブルマとそっくりだぜ」
ぱくっ

「…………。お…、美味しいっ!!!」

「フハハハハハ!!そうだろう!!!」

「407番!文句なしの合格よ!!!」

ベジータ、二次試験 後半 一番合格

「ふひいー、むじいなあ!身がぼろぼろに崩れちまう」

三枚下ろしに苦戦する悟空

手先が器用な他の参加者も、ベジータ程は上手く作れずメンチから
ダメ出しをくらっていた

「メンチ、ちよつと厳しすぎるよ…」

「仕方ないじゃない。一番最初にあんなもの食べさせられたら嫌でも
比べちゃうわよ。あの変態、美食ハンターの私以上よ」

そして……

終了ー!ー!

「ワリ!お腹いっぱいになっちゃった!」

メンチの満腹宣言と共に二次試験終了

合格者1名 ベジータ

【10】 二次試験 再試験

「だからしかたないでしょ！そうなっちゃったんだからさー！試験はやり直さないわよ！こつちだつて理由あんだから！」

メンチは大声で電話相手に怒鳴る

相手はハンター協会だ

「サスペンダーやろうがテスト生に料理の作り方指導したりしなきゃこんなことにはならなかつたわよ！とにかく試験の結果は変わらないわ！407番のみ合格よ！」

プツ

メンチが電話を切つて終わらす

電話の相手側では：

「もおく乱暴だなあ。会長、どうします？」

小男が会長と呼ぶ老人に声をかける

「ふーむ。あの娘もかなり強情だからのう。仕方ない、行くとするか」

飛行船に乗り、ハンター協会の会長は二次試験会場へと向かう

ドゴオオオオオオン

大柄の男、255番が机を叩き壊す

「納得いかねえ！オレが目指してるのは賞金首ハンターだ！美食ハンターごときに合否を決められたくねえ！」

「オラも不合格は困つぞお……」

悟空も一緒になって訴える

「残念だったわね。来年頑張ればー？」

バカにするようにメンチが挑発する

「ふざけんじゃねえええええええ！」

255番がメンチに飛びかかる

その瞬間ブハラが手ではたいて建家の外まで飛ばす

ついでとばかりに悟空もはたくが

バシン

悟空は飛んでいかない

「なにすんだよひでえなあ。豚の丸焼きあげたじゃねえか」

(そういう問題ではない…)

その時、上空から声が聞こえてくる

「それにしても。合格者一人とはちと厳しすぎやせんかの？」

ハンター協会のマークを携えた審査委員会の飛行機が会場の上と着いていた

そこから一人の老人が飛び降りてくる

ドオン！

(いままで足は大丈夫なのか!?)

「ハンター協会最高責任者…ネテロ会長…」

メンチが呟く

「メンチくん。今回の試験、本当に君の採点に間違いはないのかね？」

ネテロが問いたです

「…いえ。確かに私の採点にも問題があったかもしれませんが…」

「ふうむ。ならば再試験をせねばいかんのお」

「ネテロ会長。それではマフタツ山まで連れて行ってもらえませんか

？お題は”茹で卵”にしようと思います」

「うむ。それならよいじやろう」

ネテロの一声で再試験が決まる

テスト生たちを飛行船に乗せ、マフタツ山へと向かった

マフタツ山

真ん中でぱっかりと割れた山の頂上に悟空たちは降ろされる

「ここがマフタツ山。この底が見えないほどの裂け目から落ちたらあつという間に海まで流されるわよ。じゃあちよつと待ってて」

ひよい

メンチは説明もそこそこに谷へと飛び降りる

〈数分後〉

メンチは谷から戻ってくる

「はい、これが今回の試験の卵。クモワシの卵よ」

マフタツ山にしか生息しない貴重種の鳥

「クモワシは頑丈な巣を張るの。この狭い谷の間にしか巣を張らないから、こうやって飛び降りて取るしかない。巣は頑丈だから人が掴まっても大丈夫よ。じゃあ、スタート!」

テスト生たちは尻込みし、なかなか飛び降りられない

「簡単じゃねえか」

ふわっ

「おいカカロット!!」

空に浮き上がり谷へ向かおうとする悟空をベジータが掴んでヒソヒソと話す

「この試験では空を飛ぶことは禁止だろう!ブルマに言われたのを忘れたのか!」

「そーいやそうだったか。たはは」

「いいから着地しろ!浮いたままではいるんじゃない!」

スタツ

テスト生含めネテロたちも目を丸くする

(あ、あいつ…いま浮いとらんじゃったろうか…)

悟空たちがドタバタとしてる合間に、メンチが再度問いかける

「ギブアップするのも勇氣よ。テストは今年だけじゃないわ」

その言葉で28人がギブアップを宣言する

その中にはあの255番も入っていた

残り44人

そして悟空は…

「飛んでいけねえなら…削るか!」

ズババババババ

あつという間に地面を削り、クモワシの巣まで階段状の道を作る
「これでみんなも安全に取れっぞ」

歩いてクモワシの巣まで行き、卵を取ってくる悟空

それに続きテスト生たち44人は卵を手に入れる

(し、試験の根底が崩れている…)

「どっひやー！うめえ！最高だ！」

「なに!?食わせるカカロット!：うっ！」

「な、ほんとうにうめえだろ？」

悟空とベジータはクモワシの卵を何度も取りに行つて食べまくつた

この日、人知れずクモワシは絶滅した

そして合格したテスト生のみを飛行船に乗せる

そしてベジータは船に乗り込む前に、置いていかれることを知り呆然としている255番に近づき、Tシャツを剥ぎ取っていた

二次試験 合格者44名!

【11】飛行船内 試験官たちの会話

飛行船内

ネテロ会長がテスト生を見渡す

「ふむ、こうしてみると…なぜか全く緊張感が感じられんな…」
(こいつらのせいだよ!)

テスト生全員が悟空たちを睨む

「気になるのお…せつかくだからこのまま同行させてもらおうことにする」

ネテロの同行が決まり、テスト生は朝の8時まで自由時間となる

「あり?ベジータ着替えたんけ?」

Tシャツを着ているベジータに悟空が声をかける

「ああ、親切なやつがいたんでな」ニヤ

「それにしても試験はあとどんくらいあんだよお。そろそろオラ面倒になってきたぞ」

そこにトンパがやってくる

「試験の数はその年によつて違うが5〜6が基本だな」

「お、トンパじゃねえか!じゃああと3つくれーあるつてことけ!?!はひいー」

「だにっ!?!トンパだと!?!」

ヒイイ!

逃げようとするトンパをベジータが捕まえる

「オレ様を覚えているかトンパとやら」ニヤリ

「あ、あは…どちら様でしたっけ…」

「よほどぶつ飛ばされたいらしいな。カカロット!オレはこいつに用事がある!貴様は邪魔だ!」

「なにカリカリしてんだベジータのやつ?まあ食堂でも探してみつか」

悟空は飛行船内を探索しに部屋から出ていった

「じゃ、じゃあオレも…」

逃げようとするトンパの肩に手を回して止めたベジータは言う
「貴様、脱げ。脱げば許してやろう」

「お、ゴンとキルアじゃねえか!」

廊下でゴンとキルアを見つけた悟空

「あ、悟空! いまちようどキルアの家のこと聞いてたんだ!」

「へえー、家がなんかすげえのか?」

「あの暗殺一家のゾルディック家なんだよ!」

「バカ! あんまばらすなよ!」

「んじやオオパイパイみたいなのもんけ?」

過去に戦った相手を思い出しながら悟空は尋ねる

「ああ、あれは表に出てる暗殺者だね。うちは裏。あんなちやちなやつと比べてもらっちゃ困るね」

キルアが自慢気に話す

「でもじゃあキルアおめえも悪いやつちゆうことになるんだろ? せつかく知り合ったのにぶつ飛ばすのは気が引けるぞお」

そう言いながら拳に気を込める悟空

「き、キルア自身は悪いことしてないよ!」

「そうけ? んじややめとくか」

そんなやり取りをしていると

カッ!

ものすごい気迫が飛んでくる

バツと振り返ったゴンとキルア

しかしそこには誰もいない

「どうかしたかの?」

気迫がした方とは反対側からネテロが声をかけてくる

「やるね…」

頬に汗を流すキルア

「今のが? ちよこつと歩いただけじゃよ」

なんともない振りをして答えるネテロ

「ちがうぜじいさん。あんたに言ったんじゃない」

キルアはネテロの後ろを見ていた

「おめえ年寄りのくせに動きはええな！」

嬉しそうな悟空が立っていた

その頃、試験官たちは食事をしながら話していた

「今年のテスト生たちどう思う？」

メンチが話を切り出す

「あたしの二次試験、あの406番と407番のせいでよくわかんないことになっちゃってさあ。テスト生たちの実力が全然わかんないのよね」

「あの407番の料理、うまかったなあ…」

ブハラは思い出したようにお腹をさする

「その話はいまはいいでしょ。サトツさんはどう思う？」

「ふうむ。今年は新人がおかしいですね。スタートの遅れた406番と407番がなぜか二次試験に間に合っていましたし」

「ブハラは？」

「うーん、新人じゃないけど気になったのは44番かな。二次試験始まったときには意識朦朧としてたし」

「それもあるけど、殺気よ。255番がキレたときに殺気を放ったのがあいつよ」

忌々しげに言うメンチ

「あとオレも407番は気になったかな。メンチ気づいてた？あの人服装が段々変わっていくんだ」

「彼は特殊ですね。最初はタイツのようなものを着てました。報告によると、その後一度全裸になったようです」

「で、そのあと裸サスペンダーになったってわけ？」

「はい。そして飛行船では既にTシャツを着ていました」

淡々と話すサトツ

「44番ヒソカ、406番孫悟空、407番ベジータ、この辺りは要注意ね」

そしてメンチの言葉で締め括られた

【12】 飛行船内 ネットロのボール取り

「どうかな？お主らワシとゲームせんかな？」

ネットロがゴンたちに提案する

「もしそのゲームで勝てたらハンターの資格をやろう」

ゴンたちにとっては大サービスの提案までしてくる

「じいちゃんそれオラもやっていいのか!？」

「まあいいじやろ」

そして4人は別の部屋へと移動する

「飛行船が目的地に着くまでにこのボールをワシから奪えば勝ちじゃ。そちらはどんな攻撃をしてもいいぞ」

余裕を見せるネットロ

「ほんとに攻撃していいのか？」

「お好きなように、じやな」

「んじやいっちょよっか」

おいっちに

悟空が屈伸運動をして準備する

「んじやちよっくら…いくぞ！」

ヒュン

(早いっ！)

サツ

すんでのところでかわすネットロ

「まだまだあー！」

ブンツ ヒュヒュヒュヒュヒュン

「な、肢曲!？」

「残像拳って言うんだぞ、おりや！」

ガキイイイイイン

悟空がネットロの足を蹴る

「いってええええええ！」

「いつつたいたいのおおお！」

二人して悶絶する

「じいちゃんどんな足してんだよお」

脛をさすりながら悟空が嘆く

「お主こそどうなつとるんじや…」

(念を使った様子もないのにこの強靱さか…何か秘密があるようじやのお…)

「おっしや！本気出すぞお！」

ゴゴゴゴゴゴ

悟空が気を高めていく

ブルマに付けられたリミッターはギシギシと音を立てて軋む

「はああああああああああ！」

(い、いかん！)

ネテロも急ぎ念を練る

ズオオオオオオ

「やつぱじいちゃん力隠し持ってたか」

嬉しそうにする悟空

「お前さんも本当はまだまだ力隠しとるじやろ」

「ああ、おらブルマからリミックスつちゆうやつを付けられててほとんどパワー出せねえ」

「…リミッター、の間違いかな？」

「確かそんな名前だ。いくぞっ！」

ドガガガガガガガガガガ

悟空の連打を捌き続けるネテロ

(ワシが反撃に移れんとはっ…！)

「かぁーめえーはぁーめえー…」

(ものすごい気の高まりじや!!!)

「…やめだ」

「なんじやと？」

「じいちゃんとは本気で戦いてえ。この時計が取れたあとで再戦させてくれ」

「…ふうむ。お主がそれで良いならいいじゃろ」

悟空は気を静めて部屋から出ていく

「で、お主らはどうするんじや?」

ゴンとキルアに尋ねるネテロ

「オレはパス。あんなの見せられて取れるわけないのわかったから」

「オレはやるよ」

ゴンを残しキルアも部屋を出ていった

廊下に出たキルアは殺気立っていた

(スッキリしないな…)

うつむいて歩くキルア

ドンッ

そんなキルアは人とぶつかる

「このオレ様に殺気を持ってぶつかるとはいい度胸だな」

無視して通りすぎるキルア

「おいー!」

引き留めようとする相手を手刀で切り刻…

ドガア!

キルアは顔を殴られていた

(!?何が起こった!?オレは確かに相手を切り刻もうと動いたはずだ
!)

鼻血を滴ながら顔をあげるキルア

そこにM字の髪型をした…

ドガア!

そしてもう一度顔を殴られたキルアは意識を手放していた

時は少し遡り、悟空がネテロと戦っていた頃

バラバラバラ

トランプの山を崩したヒソカ

ピピピピピッ

(力の数値が300を越えた?)

スカウターに表示される桁の違う数値に驚いていた

「ククク…サスペンダー君かな…」

ヒソカはまた戦いをイメージして興奮する

そのヒソカの前を、サスペンダーをしたトンパがとぼとぼと通りすぎっていく

「キミ、なぜその服を着ているんだい?◆」

ズズズツ

ただならぬ気配を出し、ヒソカは立ち上がる

「ヒッ!ヒソカツ!…」

シユツ

ヒソカの腕がトンパへ伸びる

バシイイインツ!

「いってええええええええ!…」

トンパが叫ぶ

「あら?外れなかった◆」

サスペンダーを引っ張って取ろうとしたヒソカは、思いのほか強力なゴムの力に負け、ただ引っ張っただけになっていた

「ぎ、サスペンダー欲しいならやるよお…!」

半泣きになりながらトンパはサスペンダーを置いていった

「あ、ベジータ!食堂知らねえか?」

ベジータを見つけた悟空は尋ねる

「知らん。オレも探しているところだ!貴様先に部屋から出たくせにまだ見つけてないとはな!」

「ちよつといろいろあつてよお。というかまた服変えたんけ?ん、それトンパの服じゃないんか?」

「…交換してくれと頼まれたんだ」

「はえー、仲いいんだなおめえら。でも袖と丈の長さ足りてなくてち

んちんだぞ」

「それを言うならチンチクリンだ！」

キレるベジータ

「すごいやベジータ。さつき気を入れてみたんだけんどき、少しだけ力出せたぞ」

「やはりさつきのは貴様か。気づくのが遅すぎるぞ。キリコとやらの小屋を破壊したときのオレ様の気に気づいてなかったのか？」

「そーういや戦闘力20にしてはすんげえ破壊力だったな」

「たぶんこのリミッターは平常時は20でも、力を入れたら200〜300程度までは出せるみたいだ。スーパーサイヤ人になれば更に出せるかもしれんがな」

「お、飯の匂いだ」

「話を聞けええええええええ!!」

そして飛行船は順調に三次試験会場へと進んで行った

【13】 三次試験 開始

ゴウン ゴウン ゴウン

”皆様大変お待たせしました 目的地に到着です”
船内アナウンスが流れ、飛行船が着陸する
わらわら

テスト生たちは全員降り立つ

(なんだここは？何もない？)

クラピカは辺りを見回す

そこへスタート地点にいた小男が話を始める

「ここはトリックタワーと呼ばれる塔のてっぺんです。この塔を生き
て下まで降りることが三次試験の課題です。条件は72時間以内」

そう告げると小男は飛行船へ戻っていき、飛び立っていった

「ひよえー！ たっけえなあ！ カリン塔みてえだ」

下を覗き込む悟空

「ねえキルア、顔面凹んでるけどどうしたの？」

ゴンが不思議そうに尋ねてくる

「…わかんねえんだ…。気づいたらこうなってた。ひとつだけ覚えて
るのは”M”ということ」

(M…メンチさんかな？)

ざわざわっ

塔の端でざわめきが起こる

男が壁を降り始めたのだ

「普通の人間ならば自殺行為だと思うだろうが、一流のロッククライ
マーならこの程度難なくクリアできるぜ」

スツ スツ スツ

あつという間に降りていく男

ゲツ ゲツ ゲツ

そんな男に人面顔の大きな怪鳥が襲いかかる

「危ねえ！」

ドシューウツ！

悟空が男のところまで飛んで掴みあげる

同時に

ボンツ

ベジータの気弾で怪鳥がはじける

「サンキューー！ベジーター！」

「ふんっ」

掴んでいた男を塔の床に降ろす悟空

「おめえ危ねえとこだったぞ」

「あ、ああ…ありがとう」

尻餅をついたまま呆然とする

悟空はベジータの方へ近寄る

「どうすつよベジータ。飛ばねえならジャンプでもすつか？」

「既に目立ちすぎだカカロット。一般人でもクリアできる仕組みならなにか仕掛けがあるはずだ。それを探せ」

ベジータに言われて悟空はゴンたちを探しに行った

「あ、悟空」

「よお、ゴン。何か見つけたかあ？」

「うん、ここに下へ行く扉があるみたいなんだ」

床を指差すゴン

「よくわかったなあ！」

「うん、微妙に段差があるんだ。合計6つ、ここにあるよ」

「ゴンにクラピカ、レオリオとキルア、オラ。あと1人行けるな。ベジータも呼んでいいか？」

「もちろんだよ！」

ゴンが大きく頷く

「おーい！ベジータあ！」

呼ばれたベジータがやってくる

「じゃあどうなるかはわからないが全員で降りよう」

クラピカが提案し、一斉に扉をくぐる

ドサ ドサ ドサ

「…どうやら同じ部屋に通じてたようだな…」

クラピカはゴン、キルア、レオリオ、悟空を見て安堵する

「あり？ベジータは？」

そのとき、隣からベジータの声が聞こえてきた

ベジータの降りた部屋

「やあ◆」

ヒソカがベジータに笑みをかける

「なにiiiiiiiiiiii!」

「良かった◆誰も来てくれないかと思ったよ◆」

ヒソカが股間を盛り上げベジータに近づく

「く、来るなっ!」

焦るベジータ

(…カカロットの気が隣からする!)

ドガア!

壁を壊し隣の部屋を繋ぐ

「あり？ベジータ？」

悟空たちが驚いた顔でベジータを見る

(壁を壊した!?)

悟空以外は違う意味で驚いていた

「オレ様もそっちへ行く」

ブウン

そのときベジータたちの部屋のモニターに電源が入る

”ここは二人三脚の部屋。常に二人が5m以内にいないければならない。離れたことを関知すれば君たちはその場で不合格となる”

「だにiiiiiiiiiiii!」

「そーいうこと◆」

嬉しそうにヒソカは微笑む

「代われカカロット!!!」

「無理みたいだよ◆」

モニターには”44番&407番”と映し出されていた

「くそおおおおおおお!!!」

「早く戻れよベジータ。仲良くしろよな」

「ちっ！いいかヒソカという野郎！オレ様が協力するからにはカカロットには絶対負けられんぞ！」

「ふうん。キミ、サスペンダーはどうしたんだい？◆」

煽るヒソカ

「貴様ああああああ!!!」

「ベジータのやつ相変わらずうるせえなあ」

隣から聞こえてくる雄叫びを無視して悟空たちは自分の試験を確認する

”多数決の道。君たちは○×タイマーを着けて、全てを多数決で進んで行かなければならない”

考え込んでいたクラピカが補足説明をする

「ふむ、どうやら我々は5人で進む道を多数決しながらクリアしていかなければならないらしい」

三次試験 トリックタワー攻略開始！

【14】三次試験 攻略のベジータ

「さっさと行くぞー！」

ベジータがヒソカを急かして部屋を出る

「ちよつと待ってヨ◆◆気をつけないと5m越えちゃうよ？」クツクツク

「さて、貴様何を隠している!？」

ヒソカが後ろ手に隠し持っていたものを取り出す

「ククク…これ、着けようね?◆◆」

サスペンダー!

「な、なぜ貴様がそれを…!」

「いいじゃないか◆◆この片側をキミの服に、そしてもう片側を僕の服に…あ」

ヒュン バシイインツ!

伸びきったサスペンダーがベジータに当たる

「へブツ!」

運悪く顔面に当たり悶絶するベジータ

「ごめんよ◆◆」

何事もなかったかのように自分の服にも片側を取り付ける

「これが外れないように歩けば5mを越えないから大丈夫◆◆」

「貴様わざとだな!もう許してはおけん!」

殴りかかろうとするベジータ

「いいのかい?ボクがわざと離れて不合格になったら…406番の悟空には勝てないよ◆◆」ニコツ

「グググツ…貴様あ!」

(ああ!最高に楽しいオモチャだ◆◆)

興奮するヒソカと共に、ベジータたちは下への道を歩き始めた

大岩が転がってこようが

水が噴き出そうが

落とし穴が開こうが

ヒソカとベジータは難なくクリアしていく

(ちっ、むかつく野郎だが実力だけはありやがる)

(ああ、イイヨ…イイヨ…◆) ハアハア

ヒソカはただベジータのお尻だけを見ていた

「…貴様！前を歩けっ！」

悪寒のするベジータはヒソカに前を歩かせる

「いいのかい？◆」ニヤツ

「さっさと行きやがれ！」

くねくねした動きをしながら歩くヒソカ

(見ているだけでイラつきやがるぜ…)

ベジータはスタスタと後ろをついていく

「フッフ、油断しすぎ◆」

ヒソカはサスペンダーを引っ張ってベジータから切り離す

カチツ

その瞬間ベジータは何かのスイッチを踏んでしまう

「クツ…！」

ゴオオオオオオオ

ベジータは炎に包まれる

「こう見えてこの動きにもちゃんど理由があつたてこと◆仕掛けを

避けて歩いてたことにも気づけないとはね◆」

「黙れっ！」

炎の中からはピンピンしたベジータが出てくる

「ふんっ、こんなのオレ様には効かん！」

「キミには、ね◆」

ベジータの首から下を指差すヒソカ

「ただしキミの服には効いたようだ◆」ニヤリ

服は燃え尽き、ベジータはまた全裸になっていた

「よほど裸が好きらしい◆」

「好きでなってるわけじゃない！くそお！また探さんといかんとは

！」

「どうするんだい？ 恥ずかしくて動けないとでも言うかい？ ◆」

「オレ様はそんなことで臆したりせん！ 行くぞ！」

「待ってヨ ◆ その前にこれ着けなきや ◆」

サスペンダーをぶら下げるヒソカ

「服がないのに着かれるかっ！」

「突起物があればこのクリップで挟めるよ ◆」

そう言っつてベジータの下半身に視線を移すヒソカ

「なっ！ それをこのオレ様のあれに着けるだとおおおおお！！！」

「冗談 ◆ 離れないように歩いてくれればいいよ ◆」

クツクツク、と楽しそうにながらヒソカは歩き始めた

そして二人は小さな小部屋へと到着する

「待っていたぜヒソカ」

暗がりの中から男が1人出てくる

毛皮のコートを着た男だ

「ほう、ちょうどいい」

ベジータは良いものを見つけたとばかり微笑む

「用があるのはヒソカだけだ。今年は試験官ではなく復讐者として来

た。覚悟しろヒソカ！」

そう言っつて小さな曲刀を4つ回しながらヒソカへ飛ばす

ヒュンヒュンヒュンヒュン

それを紙一重でかわすヒソカ

所々かわしきれず小さな傷を作っていく

「この無限四刀流をかわし続けることはできんぞー！」

ヒュヒュヒュヒュヒュン

「うるさい」

ボボボボン

飛んでいる曲刀を気弾で消し飛ばすベジータ

「オレは急いでいるんだ。曲芸など見てられるか」

「楽しいところだったのに ◆」

残念がるヒソカを他所にベジータは続ける

「じゃあ、…脱げ」

ガコン

トリツクタワー1階のホールの扉の1つが開く

スタスタスタ

「これで終わりか？」

「みたいだね◆」

”407番ベジータ、44番ヒソカ 三次試験通過第一号！所要時間32分！”

【15】 三次試験 攻略の悟空

「ベジータたちも行っちゃったし、んじやオラたちも行くか」
ガギイ

鉄格子をひん曲げる悟空

「どうした？進まねえんか？」

「オレだってあれくらい出来るぜ…」

口を尖らせるキルア

「悟空、たぶんそういう進み方じゃないと思うが…」

クラピカは半分諦めかけていた

「お、道が分かれてっぞ」

順調に進んでいた悟空たちの前に左右に分かれた道が表れる

” 右か左の道を選べ。右なら○左ならば×を”
ピピッ

” 右3、左2”

ガアアアア

右の鉄格子がスライドして道が開ける

「左に入れたのは誰だ？…こういうときは右にすべきだろう」

クラピカが声を上げる

「なんでだよ」

不思議そうなレオリオにクラピカが説明をする

「人は迷ったとき自然と左を選んでしまうもの。だからこそこういうときは左に罠が仕掛けられてある可能性が高いということだ」

「そーいうこと。な、ゴン」

キルアがさも当然のように頷き、ゴンも微妙な顔で頷く

(オレはなんとなくだったんだけどな…)

「じゃああれってか!?悟空とオレが馬鹿だって言いたいのか!？」

「まあまあレオリオ」

悟空がなだめる

「じゃあオラとレオリオはこっちだな」

ガギイ

左の道の鉄格子をひん曲げ、悟空はササツと進んで行った
(だ、だからそういうルールじゃないんだが…)

もう声も出せないクラピカは、悟空を置いてゴン・キルアと右へ進む

「あー！ちくしょう！悟空だけ1人で行かせれっかよ！」

レオリオだけは悟空を追って左の道へと消えていった

「うっひゃー！危ねえ危ねえ！」

壁一面の穴から槍が飛んでくるのをかろうじて避ける

「なんだか小さい頃にブルマと行った水中洞窟みてえだ」

なつかしいな、と不思議と笑顔がこぼれる悟空

「も、もう大丈夫か？」

レオリオが後ろの曲がり角から顔を出す

「ああ、でえじようぶだ」

ギューイイイイイイイ

そのとき奥から機械音が聞こえてくる

ダダダダダダダ

飛び出してきたロボットは腕についた機関銃で悟空たちを撃ちまくる

「やべえ！」

レオリオを掴んで物陰へ飛び込む

「物騒なところだなあ！」

「やっぱり右の道のが良かったんだよ悟空！」

頭の上を掠めていく銃弾に首をすくめながらレオリオが叫ぶ

「ほんとなつかしいや」

なぜか心の底から嬉しそうな悟空

「クリリンも元気してっかな？…うりや！」

ドガア！

近づいてきていたロボットの腹部を蹴飛ばす
ギユイン

すぐさま体勢を立て直すロボット

「こりやぶつ壊すしかねえか！だりやあああ！」

ドーーーーーン

思いつきり蹴飛ばして遠くへ吹き飛ばす

バツ ギユイイイン

飛び起きたロボットはまた悟空へと向かってくる

「かあくめえくはあくめえく……波あああああ！」

その頃、ゴンたちは開けた場所へと辿り着きフードを被った5人組と戦っていた

戦いの場は、底の見えない吹き抜けの50m四方の部屋の中央に、

30m四方の闘技場の舞台のようなものが置かれている大広間

対岸に通路は見えるが、闘技場までの道と、闘技場から対岸までの道がない

フードの試練官たちとの戦いの際のみ道が出てくる仕様だ

試練官のスキンヘッド男、ベンドットが声をあげる

「これで2対1で君たちの勝ち越しだ！だがここは3勝せねばならん！」

「だから残り2回もオレが戦うって言ってんじやん！」

キルアが声をあらげる

「それはルール違反だ！5vs5で、戦えるのは1人1度までだ！」

「いないもんは仕方ねーじやんー！」

なおも続けるが、ベンドットは首を横に振るだけだった

そのときフードの男が前が出る

「そんなことどうでもいい…肉が掴みたい…」

「そっちのオッサンはやる気みてだぜ」ニヤリ

キルアは笑う

コンクリートを素手で掴みとる解体屋ジョネス

「子供のシャバの肉など待ちきれ…

ズアオオオオオオオオオ

まばゆい光と轟音が木霊する

全員が目覆う

そして目を開けたときにはジョネスは跡形もなく消え去っていた
ジョネスのいた場所の前後には巨大な穴が通路のように貫通して
いた

啞然とする試練官やゴンたちを他所に、呑気な声が聞こえてくる

「ふいー！強かったなあー！でもちようど道ができたぞ」

そう、悟空が穴から出てきたのだった

「オツサン誰だ？」

ベンドットに声をかける悟空

「おっ！ゴンたちじゃねえか！おーい！」

反対側にいるゴンたちに手を振る

「今のは君が…？」

ベンドットは悟空に問いかける

「びつくりさせちまって悪い悪い。ちよーつと強えやつがいたんでか
めはめ波使っちゃまった」

「かめはめは？」

いぶかしむベンドットにキルアが声をあらげる

「オツサン！これで3勝だろ!?早く道繋げろよ！」

「あ、ああ…」

まだどこか現実感のないベンドットはスイッチを押して道を繋げ
る

そして悟空たちは合流し、更に下の階へと進んで行った

幾度となく多数決とそれによる試練を乗り越える

巨大岩を悟空が受け止め

○×迷路の壁を悟空が全て砕いて直進し

地雷すごろくを悟空が気弾で破壊して

ただし多数決を気にしない悟空のせいで5人はぐるぐると回る

「あり？……最初の部屋じゃねえのか？」

悟空たちは一番最初の部屋まで戻っていた

そしてなんやかんやと時間をかけて最後の扉の前へと辿り着いた

”最後の別れ道。長く困難な道は45分、短く簡単な道は3分。ただし、短い道は3人しか行けません。2人が壁の手錠に手をはめてからしか開きません”

「ここまで来たら5人でクリアしたいよね」

ゴンが提案する

「いや、ここは3分の道を選ぶべきだ。もう時間は残り10分もない。せめて3人だけでも合格できる道を選ぶのが最善だ」

クラピカがゴンの提案を押しえて再提案する

「と、いうことは5人で戦って勝った3人が進めるってことね」

キルアが補足する

「要は戦えばいいんけ？オラおめえたちと戦うのも楽しみだぞ（忘れてた……）」

クラピカは焦る

「いや、悟空は外れてもらおう。私たち4人の中から2人選ぶ。悟空には誰一人勝てそうにないからな」

「もう時間ないし……行くよー！」

スウウ

キルアがクラピカ達を取り囲むように歩き始める

「き、キルア何人にも見える！」

驚くゴン

シヤツ

キルアがレオリオに手刀を繰り出す

（あの威力はまじい！）

悟空がキルアの手刀の鋭さを感じとり、慌ててキルアを吹き飛ばす
ドゴオ

顔面に拳のめり込んだキルアは、意識を刈り取られていた

「あいつ危ねえなあ。力の使い方上手くできねえみてえだ」

「ご、悟空助かった…」

冷や汗を流すレオリオ

「それにしてももう時間ねえんだろ？なんでおめえたち戦ってたんだ？」

「いまいち悟空は理解していなかった

その頃、ベジータはイライラしていた

クリアから70時間以上、約3日も過ぎていた

他のテスト生達が次々合格する中、悟空だけが降りて来ないからだ

「イライラさせやがる…」

そんなベジータにヒソカが声をかける

「心配かい？◆」

「心配などではない！」

「大丈夫、もう近くまで来てるヨ◆」

「なぜ貴様がわかる！」

「なんでだろうねえ◆」ククク

ヒソカは既にスカウターを使いこなしていた

悟空に詳しく説明をしたクラピカ

「要は3分の道に行きてえんだよな？」

バゴツ

当たり前前だろ、と思う4人を他所に悟空は3分の道の扉を、扉の枠ごと外していた

「んじゃ行くとすつか！」

”残り2分！”

館内アナウンスが流れる

(早くしろカカロット！)

ゴゴン

そのとき1階のホールの扉が開く

「間に合ったみてえだぞ」

あの呑気な声と共に5人が出てきた

(来たか！)

「ふ、ふん。遅かったなカカロット」

「ベジータ！おめえその毛皮の格好…また服変えたんか？」

「悟空、君を相当心配していたらしい。一番に声をかけてくるとはな

まだベジータのツンデレを知らないクラピカ

「オレは心配なんかしてなかったぞおおおおお!!」

第三次試験 通過人数27名！

【16】四次試験 開始―自由なサイヤ戦士たち―

「久しぶりのお日様だぞお」

うーん、と伸びをする悟空

なんとも呑気な雰囲気、悟空に引つ張られ、テスト生たちに緊張感は見られない

そしてトリックタワーをクリアした悟空たちは試験官のリッポーから次の試験の説明を受けていた

「私が試験官のリッポー。三次試験合格おめでとう。次の四次試験は遠くに見えるあの島、ゼビル島で行われる。四次試験が終わればあとは最終試験のみ」

ざわざわ

「そう、あと2つ。でもまずは四次試験に集中してもらいます。これから、テスト生の皆さんにはここにあるクジを引いてもらう」

(何を決めるんだ?)

不安がるテスト生にリッポーは続ける

「狩る者と狩られる者」ニヤリ
箱に注目が集まる

「この中には今いる君たちの番号が書かれた22枚のカードが入っている。それを引いてもらい、引いたものはそのカードに書かれた番号の札を手に入れる、というルールさ」

そしてもう少し詳しく、とリッポーは条件を提示する

- ①自分の番号札は3点
 - ②引いたカードの番号と同じ札も3点
 - ③それ以外の番号札は1点
- 合格の条件は6点以上持って1週間後に戻ってくることに

「じゃあまずは三次試験の合格順から…」

リッポーの合図と共にベジータ、ヒソカ、の順に引いていく
会場は静まり返っている

(これは…そういうことか!番号札をつ!)

クラピカは焦って鞆に番号札隠す

(自分の番号札を知られるのはまずい。そして自分の狙っている相手を知られるのも不利。だからこそその沈黙。引いたカードの番号も隠し通す!)

スツ

掌に隠すようにカードを引くクラピカ

「オラが最後か。よっと」

カードを引く悟空

「407番かあ、ん?ベジータの番号か!」

(バカやろおおおおお!!)

心のなかで叫ぶレオリオたち

「ふんっ、カカロットが相手とはな。楽しくなりそうだ」

これまでにない笑顔を見せながら嬉々とするベジータ

そんなやり取りを他所にリッポーは続ける

「引いた番号は記録されてるから交換や変更は無理だよ。まあ…それ

じゃあゼビル島に着くまでは船旅をごゆっくり」

テスト生たちはお互いの番号札がばれないように隠し合う

ただならぬ沈黙で包まれたまま、テスト生たちを乗せて船はゼビル

島へ向かった

ゼビル島へ到着した悟空たち

「それでは三次試験合格順に船から降りて島へ入って頂きます!次の人は2分後に、という流れでいきます!一週間後にまたここに戻ってきてください」

案内役の女性から声がかかり、四次試験がスタート

ベジータが最初に降り立つ

「さあ!次のやつ降りてこい!」

その場から動かず船を見上げるベジータ

2分が過ぎ、ヒソカが降りてくる

「やあ◆三次試験は楽しかったね◆」ククク

「き、貴様はどっかに行け!」

嫌悪感が込み上げヒソカを避けるベジータ

「さあ、次のやつだ！」

カタカタカタカタ

全身に針を刺した301番ギタラクルが降りてくる

「ちっ、貴様全身に怪我してやがるのか。そんな奴とは戦えん。次だ！」

ギタラクルも見送り、次の参加者へと視線を移す

それからベジータは降りてくるテスト生に次々勝負をしかけ、ぶっ飛ばして番号札を回収する

「お、オレ降りたくねえよお……」

泣き言を言ながらハンター協会関係者に突き落とされていくテスト生たち

「きたか……」ニヤリ

そしてまたベジータに番号札を取られていく

次はゴンの番

「や、やあベジータ」

「せめて”さん”を付けるくらいできんのかガキめ。カカロットのガキの方がよっぽど礼儀ができてやがるぜ」

「…ベジータさん、はもう6点集まってるよね？」

頬に汗を流しながらゴンが問いかける

「6点？なんのことだ！番号札を誰よりもたくさん集めるゲームだろう！」

ベジータはいまいちルールがわかっていなかった

ゴンが一生懸命説明をしている間に、キルア、レオリオ、クラピカが降りてくる

「最後はオラか、よっと」

そして最後のテスト生、悟空が降り立つ

「んじゃ皆の分もカード集めっか！」

にっこり笑う悟空

「…悟空！番号札はどうした!?!」

クラピカが悟空の胸元を見ながら声をあらげる

「番号札？あの丸い数字の書かれた、服に付けられたやつか？」

「ああ！悟空はずつと胸に着けてただろう！」

「ひっぴーん、それならなあ」ニヤツ

「どうだ！とばかりに悟空は2枚のカードを見せる

「もうオラ合格したも当然だからな」

『406』『407』の二枚のカードをクラピカに渡す

「ほらな、自分の番号と狙う相手の番号」

トリックタワーの下で引いたカードを見せびらかす悟空

「オラ今回ちゃんと話聞いてたんだ。自分の番号が3点だろお、んで狙いの相手の番号も3点。合わせて6点だ！」

(……………)

言葉にならないクラピカたち

「悟空、集めるのはカードじゃないぞ…あの丸い番号が書かれたほうだ…。このカードは意味がない」

静かに説明をするクラピカ

あちやあ、という顔のキルア

「じゃ、じゃあするってーと…、オラ0点か!？」

「そういうことになる。悟空、番号札はどうした？」

「いやあ、船の上でトンパにこの406番のカードと交換してくれって言われて交換しちまった…。これで合格できるからって教えられて…」

うなだれる悟空

「バカは相変わらずだな、カカロット」

ベジータが辛辣な言葉を投げ掛けてくる

「おめえはいいよな。いっぺえ持つてるから」

「でも他の参加者のみんな可哀想だったね…。なんか弱いものいじめしてるみたいだったから…」

ポツリと放ったゴンの一言にベジータは衝撃を受ける

(このオレ様がしたことが弱いものいじめだったとおおおおお!!!)

「貴様ら出てこい!!!番号札とやらを返してやる!!」

大声で森に向かって叫ぶベジータ

「どうした!?いらんのか!このオレ様の気が変わらんうちに取りに来い!!トンプアとやらの分だけは返してやらんがな!」

ぞろぞろぞろ

様子を窺いながら参加者たちが海岸まで戻ってくる

「あ、あの…」

おそるおそる声をかける参加者たち

「何番だ!?!」

そしてベジータは全員に番号札を返していく

「ありがとうございます」

お礼を言って森へ戻っていく参加者たち

(な、何かが違う!わからぬが何かが違う!)

クラピカの内心は乱れきっていた

「ベジータ、おめえ全部返して良かったのか?」

心配する悟空を他所に、ベジータは鼻息荒く笑う

「ふんつ、問題ない。オレ様の狙う相手は16番トンプアだったからな。

これで6点だ」

「やっぱベジータ早ええなあ」

「こんなことに一週間もかけてられるか。ちようどいい、それまで家に戻って重力室で体でも鍛えておくとするか」

「お、いいなそれ。オラも久しぶりにチチの手料理食べてえや。まだいっぺえ時間あるし先に戻るか」

「余裕かましすぎて落ちるなよ」

「ああ、でえじようぶだ。送ってってやるからオラに掴まれよベジータ」

「貴様の助けなど受けん!」

「でも飛んじやダメ、だろ」

(飛ぶ?)

首をかしげるゴンたちを無視して悟空たちは海へと向かう

「泳いで行けば良いだけだ」

(泳ぐ?どこまで?)

「んじやオラはお腹空いちまったから先けえるぞ」

シユン

消える悟空

ザバアアアン ズババババババ

海に飛び込んであつという間に見えなくなるベジータ

残されるゴン、キルア、クラピカ、レオリオ

四次試験はまだまだ始まったばかりだ

【17】四次試験 途中帰宅

シユン

「おう、帰ったぞチチ！」

自分の家へと瞬間移動で戻ってきた悟空

「悟空さ！びつくりさせねえでけろ！」

畑仕事をしていたチチは、急に現れた悟空に驚いて尻餅をついていた

「悪い悪い」

そう言いながらチチに手を差し伸べて起こす悟空

「んだ、ありがとだ。それで？ブルマさのところで上手く仕事出来てる
だか？」

「ブルマのとこっちゆうわけじゃねえんだけど、ブルマから紹介され
たハンター試験っちゆうやつを受けてるところだ」

「ハンター試験!?!あれま。悟空さがそんなの受けてるとは知ねかった
だ。すんげえお金になるっていうのだけは聞いてるぞ」

「どんくらいかは聞いてねえけど、ちゃんと試験クリアしてってるぞ」
「悟空さがか!?!そりやめでてえべ！あれから帰ってこないから心配し
てたんだべ」

「あと2つで合格って聞いてるぞ。今日は時間余ったんで途中で戻っ
てきてんだ」

「ああ…神様…やつとオラの悟空さがまともに…」

「神ったってデンデだぞ」

「なんでもいいだよ。悟空さが頑張ってくれてるだ。今日は晩御飯食
べて行けるのけ？」

ちよつと寂しそうに尋ねるチチ

「もちろんだ。チチのご飯が食べたくて帰ってきたんだしな」

「嬉しいこと言ってくれるべ。腕によりをかけて作らねえとな！あと
せっかくだ！悟飯ちゃんも呼ぶだよ！オラ急いで電話してくるだ！」

大急ぎで家に入って電話をしだすチチ

(修行だけじゃなくて仕事もしてみっか)

嬉しそうなチチを見て、悟空はそう思うのだった

そしてベジータは

ゼビル島から見えなくところまで泳いだあと、途中から空を飛んで家へと戻っていた

シユタ

家の前へと降り立ち、そのまま重力室へと足を運ぼうとするベジータ

「あれ？パパ？…何その格好」

玄関からトランクスが顔を覗かせていた

「トランクスか。気にするな。どうだ？久しぶりに一緒に修行でもせんか？」

「わーい！あ、でもパパどうしたの？気がものすごく小さいけど…」

「ちっ、そうだった。ブルマのやつのリミッターで力が出せんのだった」

「外せばいいじゃん」

無邪気に笑うトランクス

「それがこれは…！ちようどいい、トランクス。これを外せたら遊園地へ連れてってやろう」

「いいの!?!絶対だよ!」

「ああ、約束だ」

「ほいっ」

バギッ

音を立てて崩れるリミッター

「…ククク。はあああああああ!!!!」

ベジータは巨大な気を上げる

「ど、どうしたのパパ!?!」

「はあああああああ!!!」

「家が崩れちゃうよお!」

フッ

ベジータの気が静まる

「フフフ、この感覚。やはりこうでないとな」

ニヤつくベジータ

「それで？パパ、遊園地はいつ行くの？」

嬉しそうに飛び跳ねるトランクス

そこへ、ブルマが今の騒音を聞いて飛び出してくる

「ベジータ！帰ったなら言いに来なさいよ！合格はしたの!?何よその格好は！ドラゴンボール集めは!?その前にやることもあるんだからね！」

「う、うるさいやつだ…」

ベジータはブルマに引つ張られて家の中へ連れていかれる

そしてある部屋の前まで来たとき、ブルマからデッキリブラシを渡される

「あれ？ここ立ち入り禁止の部屋じゃないの？」

首をかしげるトランクス

「そう、誰かさんのせいでね」

ジーター、っと冷たい目でベジータを見るブルマ

既に何の場所かがわかってしまったベジータは無言

「とにかくまずは掃除すること。いい？」

「…わかった」

自身の屈辱を文字通り灌ぐことになるベジータ

「ボクもパパ手伝うよ！部屋見てみたいし！」

無邪気なトランクスに焦るベジータ

「い、いやっ、ここはっ！」

「あんたはいーの」

ブルマはちゃんとベジータのプライドをわかって、トランクスに見せないように別の部屋へと誘導する

「あ、でもこれは着けててね」

カシャリ

あつという間に新しいリミッターをベジータの腕にはめ、ブルマはトランクスと歩いていった

ブルマへの感謝の気持ちと、ムカつく気持ちでベジータは一杯になっっていた

そして、ベジータは自分が放出したものの掃除に取りかかった

そして悟空宅での夕食

「いやー、びつくりしましたよお。母さんが大急ぎで戻ってこないなんて言うから父さんに何かあったのかと思いました」

「ははは、すまねえだ。つい嬉しくなっちゃまって」

ガツガツ ムシヤムシヤ

美味しそうに食べ続ける悟空に悟飯は問いかける

「それで、父さんはいまどんなことしてるんです?」

「ボクも聞きたい!」

悟天が体を乗り出して興味津々で聞いてくる

「ここら、悟天ちゃんマナーの悪いことはダメだべ」

悟天をあやすチチの横で悟空が話し始める

「話すと長くなるんだけどよお…モグモグ」

「大丈夫ですよ。今日は久しぶりに家に泊まって行きますから」

「そうか? んじゃ最初はザバン市ってところから——」

ワイワイ

そうして夜は更けていった

その日、悟飯は夢を見る

でもそれはまた別のお話

【18】四次試験 悟空、点数を集める

悟空宅、明け方

「おい、悟飯。起きてくれ」

なかなか起きない悟飯を、悟空が揺すって起こす

「あれ？ボクはいまハンター試験を…」

「なに言ってるんだ。ハンター試験受けてるのオラだぞ」

寝ぼける悟飯に、朝食用の魚を取ってくることを頼んで、悟空はハンター試験へと戻っていった

シユン

「うおっ！」

目の前に現れた悟空に驚くキルア

「君にはいつも驚かされる」

既に慣れてきたクラピカ

「わりいわりい。そろそろオラも番号札ちゅうやつうを集めようかと思ってるよお」

「君は相変わらずマイペースだな」

「んで、もうクラピカたちは番号札集めたんか？」

「ああ、オレとクラピカはこの通り」

そう言って2枚ずつ番号札を見せる

「3点二枚で6点ずつちゅうことか。はえーなあ」

「早いに越したことはないんだが…。この試験は一週間。そこに嫌らしさがある」

「なんでだ？」

不思議がる悟空にキルアが説明をする

「そりゃとーぜん。その6点をあと6日も守りきらなきゃならないからな」

「あ、そういうことか」

頷く悟空

「さて、ちょうど悟空も来たことだしゴンたちと合流するか」

クラピカが腰を上げる

「ゴンたちも6点集まったんか?」

「いや、レオリオだけがまだだ。ゴンが手伝っているところだよ」

そして悟空たちもゴンたちと合流するべく、森を掻き分けていった

「あ、悟空!」

ゴンが嬉しそうに振り返る

「よっ!レオリオはどうした?」

周りを見回す悟空

「レオリオはちようどあの洞窟に入って行つたところだよ」

「なんかあんのか?」

「うん、たぶんレオリオの目標の相手がいるはず」

「じゃあそれ見つけたらレオリオも6点か」

「うん、オレもさつき6点になつたからこれで全員だよ」

ニコツと笑うゴン

そのとき

「ゴン!!来るなああああ!!!」

洞窟から叫び声が聞こえてきた

「レオリオッ!」

飛び出していくゴンと悟空

クラピカはキルアを止める

「何かあつたときの為に私たちは残っておいた方がいい」

洞窟の奥へとたどり着いたゴンと悟空

そこにはレオリオが倒れ込んでいた

「どうした!」

すぐさま抱え起こす悟空

「忠告を聞かないからよ」

そこに諦めのこもった声がかかる

「私はポンズ。そこにいる蛇使いのバーボンの罫にはまったのよ」
「罫?」

ゴンが尋ねる

「洞窟から出ようとする者に対して襲いかかるように設定された無数の毒蛇よ。あとバーボン本人に触れようとする者に対してもそう」

「なんでレオリオは…」

「そいつは君、ゴンくんだけ?に、ここに来てほしくなかったから注意する為に出口の方へ歩いちゃったの」

「毒蛇使うとかひでえーやつだなあ」

「でももう死んでるわ」

「いい!?殺しちまったのけ!?!」

「不可抗力よ。驚いて私の蜂たちが攻撃しちゃったの」

「蜂に刺されるくらいじゃ死なねーぞお」

「アナフィラキシーショックよ。まさか2度目だったとはね」

「アナルーショック?」

「違うわよ!!!はあ、もう疲れるわ」

看病をしていたゴンが声をかけてくる

「悟空、レオリオがやばそうなんだ…どうしよう」

「ほんとだ!レオリオ!」

「もう諦めなさい。ここからも出られないし、解毒剤取ろうにもバーボンにも触れない。手詰まりよ」

「でえじようぶだ」

悟空は額に手を当てる

「カリン様カリン様、っと」シユン

そしてまた消えていった

シユン

「よう!カリン様!久しぶり!」

「わあ!…なんじゃ悟空か!いつも急に現れよってからに」

「いまはちよつと急いでてさあ、仙豆あつか？」
「なんじゃ戦いか？」

ガサゴン

一応は理由を聞くが、同時に探し始めてくれるカリン様
「ん、一個あつたぞ。ほい」

パシツ

「サンキューー！」 シュン

あつという間に消える悟空

「もうちよつとゆつくりしてつてもよかろうに」

どこか寂しげな顔を見せるカリン

「おいカリン様あ。いま悟空の声だぎや聞こえてこなかつただぎや？」

下の部屋で片付けをしていたヤジロベエが顔を出す

「もう行ってしまったわい」

シュン

「よし、戻ってきた」

周りが洞窟内なのを確認して急ぎレオリオに近づく

「レオリオ！ほら、これ食べれるか!？」

カリツ

咀嚼するレオリオ

「おっ！」

驚いて起き上がるレオリオ

「ど、どういふこと？」

困惑するゴンにしたり顔の悟空

「治つてる！どんな薬だこりやあ！」

「仙豆って言うんだ。カリン様のところからもらってきたんだぞ」

「か…カリン様ってあの武術の神様の…」

一歩後ずさるレオリオ

「…それじゃあこの薬で世界中の人を治すわけにはいかないか…。神

と名のつく方の薬を独占するわけにもいかねえしな…」

「そんなことよりまずはここ出ようっ。」

ゴンが提案をする

「無理って言うてるでしょ!？」

ポンズが再度止めにかかる

「いや、悟空ならできる。どうだ、ここから連れ出してあげる代わりに君の番号札をもらおうというのは」

レオリオがポンズへ交渉をする

「ここで3点持ったまま確実に不合格より、0点になってもまだチャンスのある方にかける、ってことね…」

ポンズはレオリオに自分の番号札を渡す

「勝手に決めちまったけど、悟空いいか？」

「ああ、オラ別に構わねえぞ」

「ポンズの246番はオレの狙いの相手だな。その代わり悟空の狙いの相手、トンパの隠れ家を見つけておいたからその情報で手を打ってくれ」

「ほんとかあ!?!ありがてえ!んじやとりあえずみんなオラに掴まってく…と、その前に」

悟空はバーボンに近づく

「危ないわよあんたっ!」

ポンズの言葉を無視し、バーボンの服を調べる

ガブガブガブガブ!!!

無数の毒蛇が悟空へ噛みつく

「あとでベジータがキリコたち生き返らせる時に一緒に生き返らせてやっからな。…よっ!」

ゴオツ

そう言うってバーボンの番号札を手にした悟空は、まとわりつく毒蛇を気で吹き飛ばす

「だ、大丈夫なの…?」

心配そうに悟空を見るポンズ

「でえじようぶだ。オラの体は鋼鉄みてえに鍛えてっからな。蛇の牙

なんて通んねえぞ。さあ掴まっちゃうくれ」

そして再度全員は悟空に掴まる

悟空がクラピカの気を掴んだとき

「キャッ」パッ

ポンスは悟空の体に残っていた蛇に驚く

そして悟空たちは洞窟から消えていった

シユン

「どうやら上手くいったようだな」

背後に気配を感じたクラピカが呟く

「おう！ばっちしだ！」

大きく頷く悟空

「オレもこれで6点だけ。あとは悟空が集めるだけだな。早速トンパのところ案内してやるよ」

あっちだぜ、と声をかけて悟空を連れていくレオリオ

「我々は一度スタート地点の様子を見に行こう」

クラピカはゴンとキルアを誘って海岸線へと向かう

そのとき

「あれ？ポンスさんは？」

ゴンが首をかしげた

咄嗟に手を放してしまったポンスは、洞窟に取り残されていた

「なんでよおおおおおおお!!!」

四次試験 二日目

ゴン、キルア、クラピカ、レオリオ6点

悟空1点

【19】四次試験 日常のベジータ

四次試験 1日目の夜 ブルマ宅では

「ブルマ、掃除は終わった」

精神的に疲れきった顔で声をかけてくるベジータ

「ん、お疲れ様。お風呂綺麗にして沸かしといたから入ってらっしゃい」

「ああ（助かる）」

「いいのよ。で、服はまだそれ着るわけ？」

「いや、いつものを着る」

「だと思って脱衣場に置いてるわよ」

「ふん（礼など言わん）」

「どーいたしました」

ベジータの心を読んだようなブルマとの会話

トランクスも最近はだんだんとわかってきていた

風呂場に向かいかけたベジータは急に振り返る

「やっぱり戦闘服はいい。私服にしてくれ」

「あら？どういふ風の吹き回しかしら？」

「トランクスを…、遊園地に連れてってやらんといかんからな」

「約束ほんとだったんだ！」わーい

「バカね、夜は開いてないわよ。私服は明日準備してあげるから今日はパジャマにでも着替えて寝なさい」

「バカとはなんだ！」

「はいはい。じゃあトランクスも一緒に入ってらっしゃい。久しぶりでしよう」

「ちっ」

ベジータは踵を返して風呂場へと向かう

後ろからついてくるトランクスに何も言わないあたり、一緒に入ってくれるのだろう

「トランクスったらあんなに喜んじやって。それじゃ晩御飯でも作りましょうかね」

そういつてブルマは椅子から腰を上げた

四次試験 2日目 ゼビル島 悟空たち

「あそこだ」

レオリオが大きな木の根元を指差す

「ああ、見えたぞ。トンパだ」

「どうする？こっ所り近づくか？」

一応尋ねるレオリオ

「そんなことしねえよ。ちゃんと返してもらっただけだ」

そのまま歩いて近づく悟空たち

「よっ！」

急にかげられた声に飛び上がるトンパ

「な、なんだ悟空じゃないか…。何の、用だい？最終日まで隠れていた方がいと思うってアドバイスしたはずだが」

「アドバイス、ねえ」

悟空の後ろから現れたレオリオがたしなめるように言う

「あ、あはは。バレちゃったわけか」

ジリッ

後ずさるトンパ

「スママセンでしたああああ!!」

と、一転頭を下げて土下座するトンパ

「どうしても合格したくてよお。故郷にお腹を空かせた子供たちもいて。…どうしようもなかったんだ…」

この通りだすまん、と続けるトンパ

「そー言うことなら正直に言ってくれたら手伝ったのによお」

悟空が呆れ顔で返す

「しかも子供の一人は体に豆のようなデキモノもできちまって…」

続けるトンパ

「豆のような、だと!？」

驚くレオリオ

しめた！ばかりに更に続けるトンパ

「そ、そうなんだ全身に広がって…」

「…天然痘というやつか」

「そ、それだよそれ！やばい状態なんだ！」

「レオリオお、オラトンパから番号札返してもらわなくていいぞお。他の人探しに行こうぜ」

諦めた悟空に対してレオリオは

「天然痘はなあ、1980年5月8日にWHOが撲滅宣言出してんだ！人類の戦いの歴史否定するような嘘つくんじゃねえ！」

「う、嘘なんか!？」

「…バレたら仕方ない…逃げるのみよ！」

バシユウウウ

地面に煙玉を投げつけ白煙の向こうへと消えていくトンパ

「待ちやがれ！」

「オラもう怒ったぞ」

本気の悟空から逃げられるはずもなく、あつという間に捕まったトンパ

悟空は、自分の番号札と、トンパが他人から奪っていた番号札を1枚手に入れた

「これで自分の3点とバーボンの1点、トンパの持ってた誰かのので1点…4点か」

「5点だな」

レオリオが訂正する

「あと1点ならなんとかなりそうだ」

につこり笑った悟空は、レオリオと別れて次の相手を探しに動いた

四次試験 2日目 ベジータたち

ゴオオオオオオオオオオオ

「キャアーーーーー！」

叫び声が轟く

ベジータとトランクスは遊園地に来ていた

「恐怖を感じる為の乗り物か？」

ジェットコースターを見上げながら呟く

「違うよ！怖くて楽しいんだって！」

ワクワクのトランクス

「どこを見渡しても人だらけで嫌になってきやがるぜ」

「ねえねえ、次はあれいこー！」

トランクスに手を引っ張られ、地面を引きずられるベジータ

ズザザザザ

「あ、パパごめんなさい……」

「……………き、気を付けろよ」

「リミッターのこと忘れてたね。でもまた外すとママ怒るし」

「いい。それで何に乗りたいんだ」

にぱっ と笑顔になるトランクス

「あっちあっちー！」

(未来のお前の分まで楽しませてやるさ)

そしてベジータ親子は日が暮れるまで遊園地を堪能した

四次試験 2日目 夕方時点

悟空、5点

【20】四次試験 ほくほくの亀仙人

四次試験 2日目 夕方 ゼビル島 悟空

「あちやー。死んじまつてるやつ何人かいるぞお。ベジータがドラゴンボール使うときに上手いこと全員生き返らせてやんねえとなあ」

倒れている人たちを見つけて埋葬しながら、悟空は島を駆け巡る

「お、見つけたぞ。おーい！」

「む、何奴？」

「オラ孫悟空ってんだ」

「私はボドロ。まさか番号札を狙いに来たのか」

「あったりー！んじや番号札をかけて尋常に勝負！」

「よかろう、まだまだ若い者に負けるなどあり得ん」

そして悟空は1点追加で合計6点となる

「おっちゃん楽しかったぞ！またやろうな！」

悟空はボドロに挨拶をしてゴンたちのところへ戻る

「よっー！」

「あ、悟空」

ゴンたちと合流する悟空

「もう6点集まったのか？」

確認をするクラピカに悟空は頷く

「でもまだあと5日もあるんだぜ、長えよな」

ぶつくさどと呟くキルアに悟空が提案する

「最終日までオラと一緒に修行しねえか？」

「嬉しい提案だがあまり目立つことは避けたい」

クラピカが冷静な判断をする

「それはでえじょうぶだ。ここじやなくてもっと良い場所があんだ。

1日で1年の修行ができるところが」

「そ、そんなところが…？」

「ああ、んでもってその前に、おめえたちにどんな修行が向いてるか亀

仙人のじつちやんに見てもらう」

「悟空、確認するが…亀仙人とは武天老師様のことだったりするのか…?」

確かめるようにクラピカが聞く

「ああ、ただのスケベなじいちゃんだがな」

「オレは行くよ!」

意気込むゴン

「ゴンが行くならオレも」

キルアも名乗りを上げる

「番号札と共に安全なところへ行けるのは最高の条件だな」

そう言ったクラピカと、レオリオも互いを見合って頷く

「よし、決まったみてえだな。んじゃオラに掴まってくれ。じいちゃんは、つと」シュン

カメハウス 家の前

シュン

「お、着いた着いた。じつちやーん!」

「なんじや悟空か」

窓からサンングラスの老人が顔を出す

(このお方が武天老師様…)

「武天老師様!この度は不肖な私共に稽古をつけて頂きたく!」

クラピカが膝を折って挨拶をする

「か、堅苦しいやつちやのお…。どういふことじゃ悟空よ」

「ええー、説明すんのオラ得意じゃねえぞお」

大部分をクラピカが説明し、亀仙人は納得する

「確かにヒソカというやつは危なそうじゃのお。そいつと戦つても死なんですむくらいにはしたい、とそういうことじゃな」

「ああ、せっかく知り合えた仲間だ。できるなら一緒に合格してえ」

「まあ良いじやろう。基本の修行方法だけ教える。あとは悟空と共に精神と時の部屋で修行すると良い」

「ありがてえ！」

シュツ

喜ぶ悟空の前に亀仙人の杖が差し出される

「ただし、ぷりちーなおなごを連れてくるのが条件じゃ」

「いい!? またけ!?!」

「もちろんじゃ! 例外などありません!」

ピシヤリと言い切る亀仙人

「困ったなあ…」

頭をかく悟空にゴンが提案する

「そういえばポンスさんはどうかな? 洞窟のあと見かけてないんだけど…」

「そーういやそうだな? どうしちまったんだ?」

置き去りにしていることを忘れている悟空

「んじゃちよつくら連れてくつぞ。しばらく待っててくれ」

瞬間移動の回数制限となった悟空は飛んでポンスを迎えに行く

そして10分ほどしたのち

悟空とポンスが現れる

「どうだじっちゃん。ダメか?」

「な、何よここ!?!」

驚き慌てるポンス

「うーん、グラマスではないのお。どれどれ」

まだ状況が掴めないポンスに亀仙人が近付く

「あ、あの、どういうこと…?」

「わしは武天老師じゃ。説明はこっちでしょうかのお」

鼻の下を伸ばして家の影へポンスを連れていく亀仙人

(あ、あれが武術の達人…?)

困惑するクラピカ達

そのとき

「ぎよええええええええ!!」

亀仙人の叫び声上がる

「でえじょうぶかじっちゃん!?!」

すぐさま確認しに行つた悟空たちが見たものは

全身蜂に刺されて膨れ上がった亀仙人と

上着を脱がされたポンズの姿であつた

コホン、と咳払いをして何事もなかつたように続ける亀仙人

「もう一度じゃ。次はもっとグラマスなのを連れて来るんじゃ」

「まだ続けんのかあ。オラ苦手なんだよなあ。ブルマじゃいけねえのか?」

「もう年増じゃからの」

「それ本人の前で言うのと殺されつぞ」

「ほれ、いいから探してこんか」

杖で悟空を押し亀仙人

(亀のやつがおらん今がチャンスなんじゃ!)

「そーいや三次試験のときにフード被つた女いたなあ」

「それじゃそれじゃ!とにかく連れてこんかい!」

行け行け、と押しまくる亀仙人に負けて空を飛んでいく悟空

「もう空を飛んでるのは何も突っ込まなくなったね…」

ゴンがぼつりと呟いた

それからまた10分後

悟空が女性を連れて戻ってくる

「で、ここは何? 連れ出してくれたことにはお礼を言うけど」

(おおおお! バツチリじゃああああ!!)

亀仙人がヨダレを垂らしながら寄ってくる

「こ、コホン。このワシ、武天老師が呼んだのじゃ」

「じゃああなたにお礼をしなきゃいけないってことね。私はハンター試験で試験官をさせられてたレルートよ」

「お、お礼とはどんなことじゃ…ドキドキ」

「何がしたい…?」うふ

「おひよおおおおお!!!」

目がハートになって鼻血を流す亀仙人

「じつちゃん、合格なら修行つけてやってくれよお」

悟空の言葉に、黙つとれと目線で答えながら物置を漁る亀仙人

「ほれ、これでも着けて家の回りを回つとれ」

亀の甲羅の背負いものをゴンたちへ渡す

「これ、見た目以上に重いよ!」

「40kgあるのじゃから当然じゃ」

「んで、オラはどうすんだ?」

「お前さんはワシにはどうしようもなからう。そのポンズさんとやらを家に送つてあげるのがいいじやろ。そのあとどこかで一時間ほど時間を潰してくるのじや」

「なんで一時間なんだ?」

不思議に尋ねる悟空

「くうく、相変わらずのわからず屋め!よし、このお金で食材を買ってくるのじや!こんな人数の晩御飯はないからの!」

「それで一時間かあ、それならそうと言ってくれりやいいのによお。んじやちよつくら急いで行つてくつぞ」

ドヒュン

ポンズを抱えて飛び立つ悟空

「ゆつくりでええからの!」

亀仙人の声が木霊する

そして亀仙人は自分に視線が集まっているのを感じる

「なんじや、お前たちはさっさと走らんか!良いと言うまで走るんじや!」

ゴン、キルア、クラピカ、レオリオは甲羅を背負って走り始める
「ずいぶん待たされたけど、もう良いのかしら?」

レルートが亀仙人の腕に絡む

「も、もちろんじやよほほ」

「ちよつとわけありでえ、ここにしばらく泊めてくれたりとかしたらもっとサービスしちゃうけど」うふふ

「おひよおおおおお!ずっとおつて良いぞ!ずっとずっとじや!!」
(単純ね)

そして亀仙人とレルートは部屋へと入っていく
〜1時間後〜

「じっちゃんけえったぞー!」
ポンズを家へと送り返したあと、食材を買い込んでいた悟空が戻っ
てくる

ゴンたちは息を切らしながら砂浜を走っていた
そして亀仙人は

「うむ、悟空よ良くやった」

艶々した顔で悟空を出迎えた

四次試験 2日目終了

悟空たち6点保持でカメハウスへ!

亀仙人は艶々に!

【21】四次試験 屈辱のベジータ

トランクスと遊園地に行ってから4日
ベジータは重力室での修行やブルマの買い物などに付き合わされて日々を過ごしていた

四次試験 6日目 昼

ベジータはブルマとトランクスと食事をしていた
「ふうん、ハンター試験やめたんじゃないのね」
「当たり前だ！」

ベジータはハンター試験の四次試験の途中であり、時間があるので帰ってきていることを話す

「パパはもう6点集めて余裕なんだよね？」

嬉しそうに聞いてくるトランクス

「もちろんだ。このオレ様が一番だからな」

「パパ凄いや！ねえ番号札っていうのを見せて見せて！」

「待っている、…これだ」

トランクスへと16番のトンパから取った番号札を見せる

「なんか普通だね。もう1枚は？」

「もう1枚はオレ自身の番号札で………」

固まるベジータ

「どうしたのパパ？」

心配そうに覗き込んでくるトランクス

「…スタート地点か!?間に合ええええええ!!」

ドンッ

窓を突き破って飛んでいく

「ぱ、パパどうしたんだろう…」

「ほっときなさいよ」

さっさと片付けを始めるブルマ

ハンター試験 スタート地点 地下道

「…ないっ！」

そこには番号札のない、汚れた服しか落ちていなかった

「確かに胸の位置に番号札を着けたはず…」

ちくしよおおおおお!!!

ベジータの叫び声が地下道に木霊する

「もう一度番号札を集めるしかない…！」

ドヒュン

またベジータは高速で飛行し、ゼビル島へ向かった

ゼビル島 6日目 昼過ぎ

「確か四次試験の終了は明日の昼のはず…。そこまでに3点見つけさえすればいい。オレ様なら楽勝だ」

島へ着いたベジータは気を探る

(だいぶ数が減ったか? カカロットのやつ気も感じない…というよりこの地球から感じない?)

疑問は湧くが、ベジータはとりあえず番号札に集中する

「近くにいるな」

シャツ ズザッ

男の前に飛び出すベジータ

「やあ◆来ると思っていたよ◆」

そこにはヒソカが立っていた

「ふん、貴様が相手か。ちようどいい。この前のお礼をしてやろう」

意気込むベジータ

「なんだ、気づいたわけじゃないんだ。ちよつと残念◆」

「どういことだ!?!」

問いただすベジータ

ヒュッ と手にあるものを取り出すヒソカ

「…!お、オレの番号札っ！」

「そう◆これに気づいたのかと思ったよ◆」

「なぜ貴様がそれを持っている！」

「ボクが一度406番、悟空にスタート地点に戻されたことを覚えてないかい?◆」

ベジータは思い出す

「一次試験のヌメーレ湿原のときか…」

「そーいうこと◆◆そのときキミの汚い服から失敬させてもらったよ◆」

ククク と笑うヒソカは続ける

「もう隠しても意味がないしこれも◆」

そう言つてスカウターを取り出し装着するヒソカ

「なにっ!? 貴様それも！」

「そ、キミはなんでもよく落とす。…命も落とすのかな?◆」ニヤリヒソカは挑発する

「黙って聞いておればぬけぬけと…!ただじゃ帰さんぞおおお!!」

ベジータが気を入れる

ピ。ピ。ピ。

『312』

「力が跳ね上がる…。いいネ◆」

「それは戦闘力というのだバカ者め！」

「ふうん、覚えておくよ。ちなみにキミの数値は312。ずいぶん強いけどまだまだ◆」

「余裕ぶつてられるのも今のうちだ。貴様の数値は覚えている。たったの98だということをな」

今度はニヤリとベジータが笑う

「ふうん、自分の戦闘力は見えないからわからなかったけど、ボクはそれくらいなんだね。…いまのまま◆」

「なにっ!?!」

「まあ話をしていても仕方ない。ルールを決めよう◆」

「ルールなど関係ない! 貴様はオレ様にぶつとばされて終わりだ!」

「じゃあこうしよう。勝つても負けてもこの407番の番号札は渡そ

う」

「いまさら怖じけ付いたか貴様」

「それでもしボクが勝てば…キミにはこのサスペンダーを着けてもらおう。裸でね◆」ククク

「まだ持っていていやがったのか貴様！」

「いいだろう？キミは負けるつもりはなさそうだし◆」

「へっ、勝手にほざいてやがれ！」

ドヒュン

ベジータが地を蹴ってヒソカの顔へと殴りかかる

ズガアアアア

ベジータの拳を掌で受け止めたヒソカだったが、拳速に負けて顔面を打つ

「どうした？この程度だったか？」ニヤリ

得意気なベジータ

「やっぱりキミは強いな。でも良いことを教えて上げるよ◆」

ズズズズズズ

ヒソカの周りから圧力が発生する

(あのとときと同じか！…こいつも気を操りやがる！)

「これは念。キミたちの使う力とはちよつと違うみたいだけど…。でもたぶん10倍以上の力のはずだよ◆」

ヒュン

今度はヒソカが地を蹴る

そしてそのままベジータの腹部を蹴り上げる

ドガアア！

「グハッ！」

「まだまだ◆」

うづくまつたベジータの顔面に膝下蹴りを食らわす

ドゴオツ！

吹き飛ぶベジータ

ガラガラ

衝突した岩壁からかろうじて起き上がるベジータ

「貴様…力を隠してやがったのか…。10倍以上なら1000は超えてるか」

「そうなるのかな?◆」

ヒソカは余裕を崩さない

「ふ、ふはははははははははは!!」

ベジータは笑う

「本気を出してもその程度とはな!ラディッツやサイバイマンと良い勝負だぜ!!」

「誰のことかは知らないけど…キミじゃあ勝てないね◆」

「勝てないだと?オレたちサイヤ人を見くびるなよおおおおお!!はあああああああ!!」

ズギョオオオオ

ベジータが光輝く

シユイン シユイン シユイン

ピピピピピッ

『1016』

スカウターの桁が初めて4桁を表示する

「…な、んだい、それは?」

「スーパーベジータ様だ」ニヤツ

ベジータが笑った瞬間、ヒソカはベジータを見失う

と同時に空を見上げていた

顎をぶち上げられたのだ

ヒソカはすぐさま体勢を立て直すが、前後左右どこからも拳が飛んで来てめり込む

(堅がもたないっ!)

ボロボロになっていくヒソカ

距離を置くため、近くの石へと付けていたバンジーガムをベジータに付け替えて収縮させる

ベジータにしては急に石が飛んで来たように見えるだろう

「子供騙しなときかんっ!」

ズババババババ

全て砕いてはたき落とす

「ハア、ハア、ハア…」

「ようやく貴様から笑みが消えたな…」ニヤリ

勝利を確信するベジータ

「まだ、…わからないよ◆」

ヒソカがベジータへ飛びかかる

余裕でかわす動きをとるベジータ

バンジーガム発動！

最初の膝下蹴りのときにベジータの顔面に付けていたバンジーガムでベジータを引き寄せる

「なっ！…（顔が膝に引き寄せっ…）」

（硬！）

ズギヤアアアアアアアアアア!!

ヒソカとベジータのお互いの速度に、顔と膝という違い、そしてヒソカの最大限の硬によってベジータは戦闘不能へと陥る

「…グッ、くそっ…き、さま…」

うつ伏せに倒れたままベジータは睨む

「まさか、ボクが、ハア…ここまで追い詰められるとはね…」

そしてベジータの顔の前に407番の番号札を置く

「う、け、とれるか…」

「いいや、キミは、負けたんだ…。拒否は、できない、はずだろう」

ヒソカの呼吸もまだ整ってはいない

「そして、これも」

サスペンダーを置き、言葉を続けるヒソカ

「ボクに、いまのように…、一撃入れることができるまでは…その裸サスペンダーを、続けるんだ」

更に続ける

「約束を…破るほどの、軽いプライドの持ち主ではない、だろう…◆」

睨み続けるベジータを置いて、ヒソカは森へ消えていった

四次試験 ベジータ6点！
サスペンダーを取り返した！

【22】四次試験 みんなで修行だ

時間は数日遡り

四次試験 3日目 朝 カメハウス

「——と、というのが基本じゃな」

亀仙人がゴンたち4人へ向けて修行の基本を教え込む

「あとは、実践あるのみ、じゃの」

そう言うとう亀仙人はレルートを連れていそいそと部屋へ入っ
ていく

(え、エロ仙人…)

「んじやまずは神殿まで行くか」シユン

4人を連れて神殿瞬間移動する悟空

シユン

「よし、着いたぞ」

「こ、ここは…?」

雲がずっと下に見える

「神様のいる神殿だ」

悟空はそう言つて建物へ向けて歩き出す

「ここ、落ちたら間違いなく死ぬな…」

レオリオは首を竦めながらついていく

そんなとき、緑色をした小さな人物がやってくる

「悟空さん、久しぶりですね!」

「おおー! デンデー!」

「ポポもいるぞ」

横から顔を出すポポ

柱の影にはピッコロもいる

相変わらずの無愛想だが顔だけは出してくれる

悟空はゴンたちにみんなを紹介し、デンデたちには精神と時の部屋
を使わせてもらう許可を取る

「良いですよ、でも一般の方に耐えられるでしょうか？」

「たぶん無理だ。でも1週間、1ヶ月とかちよつとずつならなんとかなるかもしんねえ」

「そういうことならー」

さつそくデンデは神殿の奥へ案内をする

ゴンたちは驚きすぎて言われるがままついていく

「ここが精神と時の部屋です。中では1年でも、外では1日です。重力は10倍で空気も薄く、何もないとこころです」

「そんなところが本当に…」

いぶかしむクラピカにデンデは続ける

「中の広さは地球と同じくらいですから、あまり遠くに行かないようにしてくださいね！」

そしてデンデは扉を開ける

真っ白な世界が視界に映る

「一度に入れるのは2人までです。誰から入りますか？」

「なんで2人なの？」

ゴンがデンデに尋ねる

「そういう決まりなんです。2人以上入ると扉が消えてしまうんです」

ゴンたちは相談をして決める

「まずはオレとキルアが入るね！」

一番最初はゴンとキルア

二人が扉の中へ消えていく

「んじや、待つとすつか。ポポ、オラ腹減っちゃった」

食事を催促する悟空

(1年が1日なら、1ヶ月で2時間…。そんなすぐに出てこないか) クラピカは一人頷き、悟空に続く

その瞬間

バンツ!

精神と時の部屋の扉が勢いよく開き、ゴンがキルアを抱えて飛び出してくる

「悟空！キルアが！キルアが潰れちゃった！」

精神と時の部屋の重力に耐えられなかった2人

ゴンが言うには、キルアが精神と時の部屋の建物の外へ踏み出した瞬間、キルアが崩れ落ちたのだそうだ

手を伸ばしたゴンの手もバキバキに折れていた

「こりやひでえ！仙豆取ってこねえと！」

「ボクが治します！」

飛び立つ悟空をデンデが引き留める

ギユイイイイイ

キルア、ゴンの順番でデンデが回復させる

「弱ったなあ、10倍の重力もダメかあ」

頭をポリポリとかく悟空

(普通は2倍でも立っていられないはずだが…)

冷静に判断するクラピカ

「うーん、おっ！そうだ！」

悟空が何か思い至った様子で消える

瞬間移動したようだ

そして1時間後

「遅くなってわりいわりい」

悟空が戻ってくる

「ブルマに言つて重力を下げるもん作ってもらったぞ」

腕輪のようなものを差し出す悟空

「腕輪の上に浮き上がって見える数字の値まで、重力を下げるらしいんだ」

さっそく着ける4人

「なんにも感じないよ？」

「1.5っていうのが重力？」

ゴンとキルアが尋ねてくる

「そうみてえだ。いまは外にいるから重力も1のまんまだけど、精神

と時の部屋に入ればわかるさ」

そう言つて悟空がゴンとキルアを精神と時の部屋へ連れていく

「もう潰れるのはごめんんだけど…」

じと目で悟空を見るキルア

「でえじようぶだから入った入った」

背中を押して二人を入れると、ポポが扉を閉める

上手くいつているようで、それから2人は二時間後に出てきた

「まあ初めてで1ヶ月いれたら充分かな」

悟空はしたり顔で頷き、交代にクラピカとレオリオを入れる

そして一時間後、二人はででくる

「ちよつと早えなあ」

「私はまだいけるのだが彼がね」

クラピカがレオリオを指差しながら答える

出たり入ったりを繰り返しながら、日にちは過ぎていく

四次試験 6日目 夕方

「でえぶ慣れてきたみてえだな」

ゴン、キルア、クラピカ、レオリオの4人を見て悟空は言う

「ああ、みんな普通の状態で2倍の重力までは耐えられるようになったよ」

クラピカが代表して答える

「本気出したら3倍までは行けるさ」

キルアも続ける

「よし、そしたら明日の朝はオラも入ってみんなで一緒に修行すつぞ」
満足げに頷く悟空

「え、でも入れるのは2人までなんじゃ…」

ゴンが聞いてくる

「でえじようぶだ。扉がなくても出られる方法があるんだ」

そして1日が終わる

四次試験 7日目 朝

「みんな良く寝れたか？」

悟空の問いかけに全員が頷く

「じゃあ昼前の11時までには出でくつぞ」

そうデンデたちに言い残して、悟空たちは5人で精神と時の部屋に入って行った

「入ったのが7時だから、4時間。つまり2ヶ月あるということだ」

クラピカがさつそく計算をして、壁に60個のマスを書く

「1日経ったたら×を書き込むってか？」

レオリオが頷きながら眺める

「あれ、本当に掴めないや」

ゴンの手は、精神と時の部屋のドアの取っ手を掴もうとしてすり抜ける

「んじゃ始めつぞ」

その合図と共に悟空たちは修行を開始した

それから2ヶ月

「これが悟空たちが使っていた気か」

クラピカたちは気のコントロールを覚えていた

「すごい！強いよオレたち！」

気功波や舞空術までは使えないが、全身に気をめぐらせて戦闘力の大幅アップを成し遂げていた

「ありがとう悟空。まさかこんなことまでできるとは」

クラピカがお礼をする

そしてレオリオが言う

「じゃあとにかく出ようぜ」

それに全員が頷く

「悟空、どうやって出るの？」

ゴンの問いかけに悟空がしたり顔で答える

「スーパースァイヤ人3になって穴を空けるんだ」

かあああああああああ!!!

悟空が金色に輝き髪が逆立つ

(一体どういふことだ!? サイヤ人とは!?)

かああああああああ!!!

ああああああ!!!

…あり?

悟空は通常の黒髪に戻る

そして自分の腕を見ながら言う

「まじいな、リミッターのせいでスーパーサイヤ人3になれねえ」

四次試験 7日目突入

ベジータは6点

悟空たちも6点

【23】四次試験 終了

はああああああああ!!!
ぷすん

「くそお! どうしてもスーパーサイヤ人以上になれねえ!」

「この場合、我々はこの世界に閉じ込められたということになるのだろうか」

クラピカが悟空に尋ねる

「ああ、すまねえ。オラとしたことが…」

うなだれる悟空

「そんな…ミトさんに会えなくなる…」

ゴンがうつすらと涙を浮かべる

「ブルマのやつなんつちゆうもん作ってくれてんだ…」

苦々しげにリミッターを見つめる悟空

そして人生が終わったかのように空を仰ぐ4人

四次試験 最終日 終了まであと15分

ゼビル島では、テスト生たちが海外沿いに集まって隠れていた

誰もが残りの15分を心待ちにして

ベジータは海岸に一人で立っていた

誰もが見慣れた、二次試験時の格好

裸サスペンダーで

(くそ、このオレ様がいいぎまだぜ…)

約束を破る恥ずかしさより、格好の恥ずかしさを選んだベジータ

それよりもなによりも、悟空が島にいないことを危惧していた

「カカロットのやつ忘れてるわけじゃあるまいな…」

そして再度島全体にアナウンスが流れる

”四次試験終了まで、あと5分!”

その頃、神殿の外では

「どうだ?! いけるか悟飯!」

時間になっても出てこない悟空たちを心配して、ピッコロが悟飯を連れてきていた

「おそろくだがあいつのことだ、何かをやらかして出てこれられなくなってるはずなんだ!」

ピッコロが力強く悟飯に訴える

「ええ、ボクもそうだと思います」

「外から破るには大きな気の力で空間を捻じ曲げなければならん!」

「はいっ!」

ピッコロに言われて気を上げる悟飯

はああああああああ!!!

「その勢だ! アルティメットになれ悟飯!」

ズギョオオオオ

シュイン シュイン

スーパーサイヤ人になる悟飯

「違う! もう一度だ!」

「はいっ!」

久しく気を入れてなかった悟飯はアルティメットへなかなか変身できずにいた

試験終了まで残り3分

そして精神と時の部屋では

グギギギギギギギ!!!

悟空が一生懸命リミッターを剥がそうとしていた

「な、ん、てえ、がん、じょう、な、んだよ!」

試験終了まであと1分

「まづいぞ悟飯! もう時間がない!」

「わかってます！はあああああああああ！」
キュピン

ズオオオオオオオオ

圧倒されるほどの存在感が激流となってピッコロを襲う
「なれたかつ！」ニヤリ

「はいっ！」

「今すぐ次元に穴を空けるんだ悟飯！」

だああああああああ!!!

気合いを何も無い空中に飛ばす

ズツ

空中に白い空間が映る

試験終了まであと20秒

「お父さん！こちらです！」

穴から顔を出し悟空たちを呼ぶ

「サンキュー悟飯!!!」

悟空は4人を掴むと穴から外へ飛び出す

終了まであと10秒

「わりい！じゃあな！」シユン

そのまま消える悟空たち

「まったく、いつまでも面倒かけやがるぜ」ニヤツ

「ほんとですね…たはは」

あとに残されたピッコロと悟飯は笑いあった

シユン

ゼビル島に到着する悟空

「ふいー！間に合ったか!?!」

「やっと来たか」ニヤリ

悟空を見て喜ぶベジータ

「ぶっひゃー！ベジータ！おめえまたその格好！」

あひゃひゃひゃひゃ！

悟空の笑い声と共に四次試験終了の合図！

四次試験合格者9名

ヒソカ

ギタラクル

ハンゾー

キルア

ゴン

クラピカ

レオリオ

悟空

ベジータ

【24】最終試験 事前面談

四次試験が終了し、飛行船へと乗せられた悟空たち
最終試験の会場まで移動する

そして飛行船の中ではネテロ会長や試験官たちが話をしていた

「9人中8人が新人か。おかしいのう」

ネテロが頭をポリポリとかく

「たまにこんなことってあるんですか？」

ブハラの質問に引き続きネテロが答える

「いいや、1度もあらせんわい」

シーンとなるその場をサトツが割る

「ところで最終試験は一体何をするのでしよう？」

「うむそれだが一風変わった決闘をしてみらうつもりじゃ。そのため
の準備としてまず9人それぞれと話がしたいのオ」

ネテロはそう言つて髭をさすつた

飛行船内 廊下

「ゴン、どうしたこんなところで」

窓からの景色を見ながら黄昏るゴンに、クラピカが声をかける

「なんとというかさ……」

ゴンは口ごもりながら続ける

「これでいいのかな、つて思つちやつて……」

「いい、とは？」

「うーん、ハンター試験つてさ……それぞれの試験でいろんな能力を見
てるんだつて思つたんだ」

「確かにそうだな、そうじゃないとやる意味がない」

ゴンの言葉にクラピカが力強く頷く

「でもさ、一次試験は悟空に助けられてさ。そして悟空に案内までし
てもらつた」

「あのときは危なかつたな」

「二次試験のグレイトスタンプは悟空の戦いがヒントになったし、次の寿司の試験はベジータさんが全部教えてくれたし」

「そ、そういえばそうだな」

「二次試験の再試も悟空が道を作ってくれたし」

「う、うむ…」

「三次試験も悟空が力づくで突破してくれたし」

「…」

「四次試験もベジータさんが一度番号札集めてくれたから標的もわかったし、相手もボロボロで簡単に番号札取れたし」

「…」

「それに悟空が島の外に連れ出してくれたから四次試験中に番号札を取り返される心配もなかったし」

クラピカは真っ白になっていた

ゴンは続ける

「で、思ったんだ…。オレたちって、ハンター試験では走ったことしかしてないんじゃないかって」

ゴンの言葉はクラピカの心に深く突き刺さっていた

飛行船内 ネットロの部屋

「んじゃちょっと面接でもするかの」

ネットロは自室にテスト生たちを順番に呼び、いくつかの質問を投げ掛ける

へ44番 ヒソカ

「なぜハンターになりたいのかな？」

「資格を持っていると便利だから◆例えば人を殺しても免責になる場合が多いしね」

ネットロの問いに淀みなく答える

「なるほど。ではお主以外の8人で一番注目しているのは？」

「407番。406番もいいけどやっぱり407番が好きかな◆」

「ふむ、では最後の質問じゃ。今一番戦いたくないのは誰じゃ?」
「…それも407番かな。まだきつと力を隠してそうだからね。まだ再戦の時じゃない」
「うむ、ぐ苦勞じゃった。下がってよいぞ」

一番最初のヒソカを皮切りに、ネテロは次々とテスト生を呼んで質問をしていく

- ① 「一番注目しているのは?」
- ② 「今一番戦いたくないのは?」

〈301番 ギタラクル〉

- ① 「99番」
- ② 「44番」

〈294番 ハンゾー〉

① 「407番のベジータだな。母国の料理を知ってたし嫌でも目立つしな」

- ② 「44番ヒソカはできれば避けたい」

〈99番 キルア〉

- ① 「406番の悟空。一緒に修行してみても格の違いがわかったよ」
- ② 「407番ベジータかな。なんか苦手なんだ」

〈405番 ゴン〉

- ① 「406番の悟空かな。やっぱりすごいよ」
- ② 「うーん、全員かなあ。選べないや」

〈403番 レオリオ〉

① 「406番の悟空に注目してる。伝説の仙豆も食べさせてくれたしな」

- ② 「同じく恩があるから406番の悟空だな」

〈404番 クラピカ〉

①「406番悟空と407番ベジータ。彼らのおかげでここにいるのだから」

②「99番キルアと、403〜407番まで戦いたくないな」

〈406番 悟空〉

①「44番のヒソカとネテロのじいちゃんも、かな」

②「オラ全員と戦いてえぞ」

〈407番 ベジータ〉

①「ちっ、44番ヒソカの野郎だ」

②「そんなやついるか！全員ぶっ飛ばしてやる！」

そして全員の面接が終わったあと

「ふむ、偏ったの」

ネテロ頭を書きながら対戦表を眺める

そうしているうちに、最終試験の会場へと飛行船は到着する

「さて、ゆっくり休めたかの？」

ネテロはテスト生9人に声をかける

場所はハンター協会の委員会が経営するホテルの一室

「最終試験はこれじゃ」

そう言っつてボードの布を剥ぐ

「トーナメント。しかも勝ち抜けじゃ」

ハンゾー、ゴン、ベジータ、レオリオが5回戦える

ヒソカ、クラピカが4回

キルアとギタラクルが3回

悟空が1回

となっていた

「質問。なんで公平じゃないわけ？」

キルアがネテロに投げ掛ける

「試験の成績などから決めておるんじやよ」

「それ納得できないな。もっと詳しく教えてよ」

「ダメじゃ」

「なんでだよー！」

食い下がるキルア

「ふうむ。やり方くらい説明しやろうかの」

そう言ってネテロは指を3本立てる

「身体能力値、精神能力値、そして印象値この3つからなる。重要なのは印象値。これはハンターの資質みたいなもんじやな」

全員が静まりかえる

（悟空は身体能力値はMAXのはずだ。印象値は不明だが…精神能力値が低いということか…）

クラピカは分析をしていた

さて、とネテロが続ける

「ルールは単純明快。武器使用OKの反則なし。”まいった”と言われれば勝ち。じゃが！相手を殺してしまった者は即失格となる」

ネテロがそう宣言した時

「ベジータあー！見に来てあげたわよー！というかあんだなんて格好してるのよー！いやよ変態なんて！」

試合会場のVIP席から声援が飛ぶ

ブルマが見に来ていたのだ

「パパ…嘘でしょ…」

トランクスの泣き声も混じる

「なぜブルマがここにいる！」

「ほっほっほ、カプセルコーポレーションはハンター協会の筆頭株主じゃからの。招待券は毎年送っておる」

ネテロが答える

「そーよ！あんた私が見に来てやったんだから頑張りなさいよ！孫くんも頑張るのよー！」

「おー！サンキューなー！」

手を振り返す悟空

一瞬にして場の雰囲気が変わる

コホン とひと咳し、ネテロが宣言する

「第一試合、ハンゾー vs ゴン はじめっ！」

【25】最終試験 試合開始（1）

第一試合 ハンゾー vs ゴン

「よう、久しぶり」

ハンゾーはゴンより先に試合の立会人に声をかける

「四次試験の間ずっとオレを尾けてたろう」

「お気づきでしたか」

立会人は驚きをもって答える

（知らなかった…）

ゴンとレオリオだけ汗を流す

「礼を言うぜ。オレの評価が高いのはあんたの評点のお陰だからな。ついでに聞くが…」

と、ハンゾーは更に続ける

「勝つ条件”まいった”と言わせるしかないんだな？ KOもなしで」

「はい、それしかありません」

立会人は頷き答える

（こいつは厄介そうだ）

ハンゾーはそう思いながらゴンを見据えた

その頃ヒソカはスカウターに映る数値を見ながら楽しんでいた

（ハンゾーは戦闘力58、ゴンは29！最初の8より随分上がってるじゃないか…ククク）

そんなヒソカを他所に戦闘は始まる

ガガガガガガガ

縦横無尽に部屋中を飛び回るゴン

「足には自信あり、って感じだな」

シャツ と動いてゴンの裏を取る

（早いっ!!）

ゴンは後ろに蹴りを繰り出しながら着地する

「子供にしてはなかなかだ。だがオレとは違う」

ハンゾーはそう言いながら人差し指だけで垂直に立つ

「いいからさっさと戦いなさいよー」

そこへブルマの野次が飛ぶ

「オレも力、見せるよ」

ゴンはそう言っただけで気を込める

ピピピ

『45』

(でもまだまだ…◆)

ゴンはハンゾーに攻撃を繰り出すが、全てかわされて反撃を食らう
必死に食らいつくが、ついに腕を捻り上げられて床に抑えつけられ
る

「どうする?」

ハンゾーが尋ねる

「…まいった」

そしてゴンは宣言したのだった

第一試合終了! 勝者ハンゾー!

ゴンに駆け寄るクラピカたち

「どうしたんだ。ゴンなら負けを宣言するはずはないと思っていたの
だが」

「うん、そのつもりだったんだけどさ…。悟空と修行してて思ったん
だ。全力出して勝てなかったときはちゃんと負けを認めることも大
切って」

ゴンは清々しい顔をして答えた

そんなゴンたちを横目に、ネテロは第二試合を宣言する

「第二試合 ベジータvsレオリオ はじめっ!」

両者向かい合う

「ほう、もしかしてこのオレ様とやる気か?」

(んなわけあるかっ!)

レオリオは手を挙げて宣言する

「まいったー！」ドローン

第二試合終了！ 勝者ベジータ！

「わあい！パパが勝った！」

喜ぶトランクスに手を振り、ベジータは戻っていく

ネテロは気を取り直し、次を宣言する

「第三試合 ヒソカvsクラピカ はじめっ！」

ピピピ

『39』

「随分力をつけたみたいだね◆」

ヒソカは値踏みするようにクラピカを見る

「だからこそヒソカ、君には勝てないことがわかる。本気を出しても君には届かないだろう」

そんなクラピカにヒソカは近づき耳元で囁く

「蜘蛛について教えよう」

そしてヒソカは負けを宣言して舞台から出ていった

第三試合終了！ 勝者クラピカ！

次々と進む試合

ネテロは更に次の試合の宣言を行う

「第四試合 キルアvsギタラクル はじめっ！」

今まで一言も話さなかったギタラクルは、急に全身の針を抜き始めた

ビキ ビキ

「…兄貴……」

「やあキル。母さんとミルクを刺したんだって？」

冷や汗を流すキルアに、イルミは続ける

「立派になった、と感激してた。でもまだ外に出すのは早いから様子を見に来たよ。ハンターになりたかったのかい？」

「別に。ただなんとなく受けてみただけだよ」

ジリジリと後ずさるキルア

「良かった。実はオレも次の仕事でハンターの資格が要るんだよ。キルはただ人を殺す道具。望みなんてないだろう」

「オレにだってあるさ…」

キルアは呟く

「言つてごらん。何が望みだい?」

イルミに問われ、キルアは答える

「ぶ、武道家になりたい」

「なんだつて!?!」

イルミが壊れる

「悟空みたいな強い武道家になりたいんだ」

「なんだつて!?!」

イルミは聞き直す

「だから言つてるだろ! 武道家になりたいんだ!」

叫ぶキルアにレオリオが被せて言う

「武道家になりたいだど!?! そう思つてる時点で武道家なんだよ!」

「そ、そんな馬鹿な…。誰がそんなことを教えた…」

イルミはふらつく

「悟空が教えてくれたんだ」

キルアの返事にイルミはキレて念を絞り出す

「悟空を殺そう。そうすればいつものキルに戻るはずだ…」

イルミは悟空の方へ歩き出す

「そうはさせない」

キルアが全力で気を込める

ピピピ

『66』

(それじゃあイルミには勝てない◆)

飛びかかるキルアの後ろに回り、後頭部を掴んで床へと叩きつける
「ぐっ!」

全身を抑えつけられるような重圧がかかる

「動きが良くなった？キル、何をしたんだい？」

イルミが首をかしげてキルアに問う

「教えないね」

歯向かうキルアに更なる重圧をかける

(やべえ!!)

シャツ ドガア！

悟空がイルミを蹴飛ばしてキルアを助ける

「そこまで！」

立会人が間に割って入る

「キルア選手の手助けをしたと見なし、ギタラクル（イルミ）選手の勝ちとします！」

「そんなことはいい！でえじょうぶかキルア！」

抱え起こす悟空

かろうじて返事をするキルア

第四試合終了！ 勝者ギタラクル（イルミ）！

【26】最終試験 試合開始（2）

「第五試合 ゴンvsレオリオ はじめっ！」
両者睨みあつて中央で構える

「負けないぜっ！」

レオリオから動く
ピピピ

『37:41:54』

「おらああああ！」

気を最大限に引き出しながらゴンへと拳を繰り出す
（ふうん。彼も強くなっている。ゴンも45まで上がってるし…何かあつたようだね◆）

レオリオは攻撃し続けるがゴンには当たらない

「オレだつてスピードは負けない！」

シユツ

レオリオの視覚外から蹴りを繰り出す

ガツ

苦悶の顔を浮かべながらもレオリオはその蹴りを掴む

「スピードはこれで活かさないぜ」

そしてゴンの顔面に拳を繰り出して…

「まいった」

寸でのとことでゴンがギブアップ

第五試合終了！ 勝者レオリオ！

第六試合のゴンvsヒソカは、ヒソカの

「いまの時期じゃない」

の一言でヒソカがギブアップして終了

同じく

第七試合のキルアvsヒソカも、ヒソカの

同じ言葉でヒソカがギブアップして終了

あつという間に最終試験の最後の戦いがやってくる

「第八試合 悟空 vs ヒソカ はじめっ!」

ヒソカはつまらなそうに悟空を見る

「なんだよ、気合い抜けてつと楽しくねえぞ」

「そうは言ってもね…。キミもベジータと一緒に本気出せないんでしょ?」

明らかにつまらなそうにするヒソカ

「スーパーサイヤ人になったら驚かせてやれると思うけどなあ」ニヤリ

「いや、それももういいよ」

「へ?知ってるんか?」

「それとやる時は命のやり取りがある場でしたいのさ◆それにちよつとハンターの資格も必要なんでね◆」

「オラもそのハンター試験つちゅうやつに合格しねえといけねえんだ」

「理由はなんだい?◆」

「食費稼がねえといけねえんだ」

「…そうか」

あからさまに呆れるヒソカ

「つまらない試合にはしたくないからね◆」

気を取り直し、トランプを床にばら蒔く

「この中から一つ好きな数字を選んで頭に思い浮かべて◆」

「あ、ああ」

数字を見て頷く悟空

「思い浮かべたらその数に4を足して2倍する」

(…?)

「そこから6を引き、2で割ったあとに最初の数字を引くと…いくらになるかな◆」

(…やべえ、計算できねえ)

「ベジータ、キミ、後ろを向いてもらえるかい？」

場外のベジータに声をかける

「ちっ、何をしゃがるつもりだ」

舌打ちしながらベジータは振り返る

そこにはトランプの”1”が貼り付けられてあった

どよどよっ

ざわめく会場

悟空は理解が追い付いていなかった

ネタを仕込まれているのに気づいたベジータは必死にトランプを取ろうとするがちょうど取れない良い位置に付いていたため、四苦八苦ししている

「いまのがわからないのは残念…」

肩を落とすヒソカ

「すまねえ。まいったなあ。頭の勝負で来るなんて思ってたなかったぞ」

その瞬間

「勝者ヒソカ！」

立会人が宣言する！

ざわざわっ！

「悟空選手は”まいった”と宣言した為、ヒソカ選手の勝利となりますー！」

「iiiiiiiiiiiiiiii!?!」

それからクラピカたちの異議も虚しく、ハンター試験は終了した

【27】最終話

合格者だけを集めて別室へと向かおうとする一向
取り残された悟空はポツンと会場に佇んでいた

「…まあ、いつか」

そして別の扉から出ようとしたとき

「待てカカロット」

ベジータが引き留める

「ふん、いいからしばらく待っている」

そう言っつてネテロたちと別室へ消えていった

ブルマたちはもう帰ろうとしているようだ

「孫くん、残念だったけど…。働き口は責任もって探しておくわよ！」

「ああ、頼んだ！サンキューな！」

買い物をして帰ろうとせがむトランクスの手を引き、ブルマたちも
会場から出ていった

ベジータたちは、別室内でハンターの基礎について説明を受けてい
た。

ハンターライセンスを売ればお金になること

様々な施設が自由に使えること

ライセンスを5人に一人は無くすこと

などなど

そして説明は終わる

ベジータは部屋を出ると、そこに待っていた悟空と相對する

「オレには金など不要だ。持っておけ」

そう一言告げてライセンスカードを悟空に渡し、ベジータは飛んで
いった

「持っつけて…ベジータ…」

空を見上げる悟空

そこにはもうベジータはいない

静かにカードに視線を落とす

「いつまで持つとくんのだ？」

悟空宅

とりあえず帰宅をした悟空

不合格に残念がるチチだったが、悟空の「働きたい」の一言で目尻に涙を浮かべて喜んだ

そして悟空は困ったようにライセンスカードをチチに見せる

ベジータの気遣いがわかるチチは

「んだ、これはすんげえ大事なもんだべ。使わねえで取っとくのがいいだ」

そう言つて悟天に四星球の隣に飾るように言う

「あのベジータさんから贈り物だべ。悟空さはこれを大事にしねえといけねえだよ」

嬉しそうに言うチチ

「ああ、そうだな。そういやベジータのやつこれからドラゴンボール集めるはずなんだ。オラちよつくら持つてつてやんぞ」

逆に四星球を握つて悟空は瞬間移動していく

ブルマ宅 カプセルコーポレーション

先に帰ったベジータに遅れること1時間

ブルマとトランクスは、ベジータへの合格祝いを買ってきていた

「ふん、そんなのいらん」

というベジータだったが、トランクスのわくわくしている顔を見てプレゼントに手を伸ばす

「早く”着て”みてよー」

というトランクス

アクセントに違和感を覚えながら包みを破ると

『トランプ柄のサスペンダー』
が出てくる

(なにい!?)

「パパが最終試験で着けてたから。ちよつと最初引いちゃったけど、プレゼントは相手の好きなものじゃないといけないと思って!」

ニコニコのトランクス

「まさかあんたの趣味がそんなとはねえ…」

呆れ顔のブルマだが、トランクスの喜び様を見て嬉しそうにする

「さあ、トランクスからのプレゼントよ。私たちしか見てないんだからさっさと着けてらっしゃい」

ベジータは逡巡ののち、トランプ柄のサスペンダーを着けて出てくる

「あら? 似合うじゃない」

「ほんとだ! パパカッコイイよ!」

「こ、これを見せるのは家族であるお前たちだけだからな!」

握りこぶしを作って力強く訴えるベジータ

シユン

「よつ、ベジータ! 四星球使うだろ……つて、

あひやひやひやひやひやひやひや!!」

そして悟空の笑い声とベジータの怒鳴り声が響き渡った

くおわりく